

令和7年度作文コンクール表彰式の模様

本会主催・東京商工会議所後援「令和7年度作文コンクール」表彰式を、令和7年12月19日(金)に東京商工会議所にて開催しました。今年度は多数の応募の中から、中学校の部26名、高等学校の部24名、専修学校の部2名、イラストの部1名の方が入選されました。また、本会の会誌「東京の産業教育」表紙イラスト・デザインコンクールの表彰も併せて行いました。



表彰状および賞品の授与



最優秀作文の朗読



中学校の部
北区立明桜中学校
島本 結 さん



高等学校の部
東京都立農芸高等学校
山田 弥彦 さん



専修学校の部
ハリウッド美容専門学校
小島 彩佳 さん

講 評



中学校の部
世田谷区立三宿中学校長 濱川 一彦 先生



高等学校・専修学校等の部
東京都立忍岡高等学校長 紺野 智恵子 先生

祝 辞



東京都産業教育振興会
西澤 宏繁 会長



東京都教育委員会
長谷 克己 ものづくり教育推進担当課長

作文コンクールの後援をいただいている東京商工会議所様のご厚意により、素晴らしい会場をお借りして、盛大な表彰式を催すことが出来ました。心より御礼を申し上げます。

明日に生きる ―作文コンクール入選作品集― 第三十六号 目次

講評

作文選考を通じて

中学校の部

選考委員長（世田谷区立三宿中学校長）

濱川 一彦

ページ

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部

選考委員長（東京都立忍岡高等学校長）

紺野 智恵子

中学校の部

ページ

| | | | | | |
|------|-----------------|-------------|----|--------|----|
| 最優秀賞 | 私の宝物 | 北区立明桜中学校 | 二年 | 島本 結 | 3 |
| 優秀賞 | 地域の人と子育て | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 室井 奏 | 4 |
| 優秀賞 | 大切なこと | 杉並区立泉南中学校 | 二年 | 稲川 絢音 | 5 |
| 優秀賞 | 社会を支える裏方 | 杉並区立泉南中学校 | 二年 | 高橋 美来 | 6 |
| 優秀賞 | 小さな笑顔から学んだ大きなこと | 北区立明桜中学校 | 三年 | 橘 蘭一星 | 8 |
| 優秀賞 | 当たり前のこと | 練馬区立豊深中学校 | 二年 | 鈴木 理人 | 9 |
| 佳作 | 未来に活きる授業 | 中央区立晴海中学校 | 三年 | 樽木 碧 | 10 |
| 佳作 | 感謝で繋がる世の中 | 墨田区立両国中学校 | 二年 | 崔 禎 | 11 |
| 佳作 | お花畑と岩の間の少女 | 品川区立大崎中学校 | 三年 | 山崎 史織 | 12 |
| 佳作 | 将来に向けての第一歩 | 世田谷区立瀬田中学校 | 二年 | 重弘 結瑞 | 13 |
| 佳作 | 測定と制御く現代を支える技術く | 世田谷区立尾山台中学校 | 三年 | 佐藤 レオン | 15 |
| 佳作 | 笑顔の力 | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 石井 環太 | 16 |
| 佳作 | 「見えない努力」に気づいて | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 岩佐 虎徹 | 17 |

高等学校の部

| | | | | | |
|------|--------------------|-----------------|----|--------|----|
| 佳作 | ここに生きる私たち | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 小松 ゆり | 18 |
| 佳作 | 家庭科が与えてくれたもの | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 寺嶋 郁乃 | 20 |
| 佳作 | 未来を育てる裏方 | 世田谷区立三宿中学校 | 三年 | 野津 歩花 | 21 |
| 佳作 | 職場体験で学んだ大切なこと | 杉並区立泉南中学校 | 二年 | 柳田 よつば | 22 |
| 佳作 | 家庭菜園の楽しみと喜び | 北区立稲付中学校 | 三年 | 松本 諒 | 23 |
| 佳作 | 職業体験で学び得たこと | 北区立明桜中学校 | 三年 | 日名子 恵実 | 24 |
| 佳作 | 職場体験で学んだ「働くことの喜び」 | 足立区立第十二中学校 | 二年 | 村山 明花莉 | 26 |
| 佳作 | 職場体験を通して | 江戸川区立小松川第二中学校 | 三年 | 勇田 果穂 | 27 |
| 佳作 | 気づいた夢 | 江戸川区立小松川第二中学校 | 三年 | 坂口 真央 | 28 |
| 佳作 | 私の将来の夢 | 江戸川区立小松川第二中学校 | 三年 | 庄司 桜子 | 29 |
| 佳作 | 心を繋ぐ | 江戸川区立小松川第二中学校 | 三年 | 末吉 明莉 | 30 |
| 佳作 | みんなが輝ける社会へ | 国分寺市立第四中学校 | 三年 | 望月 こころ | 32 |
| 佳作 | 社会を変えたい | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 三年 | 内山 紗桜 | 33 |
| 最優秀賞 | 馬糞で拓く新たな魅力 | 東京都立農芸高等学校 | 三年 | 山田 弥彦 | 35 |
| 優秀賞 | 私の今昔の物語〜学ぶことが生きがい〜 | 東京都立橘高等学校 | 四年 | 染谷 豊一 | 36 |
| 優秀賞 | 将来の夢 | 愛国高等学校 | 一年 | 小久保 杏葉 | 38 |
| 佳作 | 様々な環境に触れて | 東京都立園芸高等学校 | 二年 | 高久 心暖 | 39 |
| 佳作 | 喜び | 東京都立園芸高等学校 | 二年 | 坂本 ひなた | 40 |

| | | | | | | |
|---|---|--------------------|--------------|----|--------|----|
| 佳 | 作 | 食品ロスを減らす未来の飲食店 | 東京都立農芸高等学校 | 二年 | 関根 緑 | 41 |
| 佳 | 作 | 援農ボランティアで紡ぐ地域と農業 | 東京都立農芸高等学校 | 二年 | 長瀬 海音 | 43 |
| 佳 | 作 | 服づくりに込める思い | 東京都立農業高等学校 | 二年 | 石原 もあ | 44 |
| 佳 | 作 | 農業高校と出会って | 東京都立農業高等学校 | 二年 | 一之瀬 結衣 | 45 |
| 佳 | 作 | 三宅島に生まれて | 東京都立三宅高等学校 | 二年 | 沖山 海璃 | 46 |
| 佳 | 作 | 道 | 東京都立八丈高等学校 | 一年 | 佐藤 瑠海 | 47 |
| 佳 | 作 | 電気に対する意識 | 東京都立蔵前工科高等学校 | 一年 | 谷中 宗司 | 48 |
| 佳 | 作 | つくることの楽しさ | 東京都立墨田工科高等学校 | 二年 | 澤 蒼介 | 49 |
| 佳 | 作 | 夢は公認会計士 | 東京都立葛飾商業高等学校 | 三年 | 在原 杏美 | 51 |
| 佳 | 作 | 数字から見える企業の実像 | 東京都立葛飾商業高等学校 | 三年 | 篠原 暖乃 | 52 |
| 佳 | 作 | 夢は子どもと家族の笑顔を支えること | 東京都立葛飾商業高等学校 | 三年 | 仲野 優衣 | 53 |
| 佳 | 作 | 挑戦が私を強くする | 東京都立葛飾商業高等学校 | 三年 | 森田 有紗 | 54 |
| 佳 | 作 | 私の夢 | 東京都立忍岡高等学校 | 三年 | 石井 唯 | 56 |
| 佳 | 作 | 人と向き合う大切さ | 東京都立忍岡高等学校 | 三年 | 井出 なな実 | 57 |
| 佳 | 作 | 食を通して気づいた協力と挑戦の大切さ | 東京都立忍岡高等学校 | 三年 | 木下 綾華 | 58 |
| 佳 | 作 | インターンシップで得た大切なもの | 東京都立赤羽北桜高等学校 | 二年 | 清原 千姫 | 59 |
| 佳 | 作 | 将来の夢と特別な体験 | 東京都立赤羽北桜高等学校 | 二年 | 倉地 勇吾 | 60 |
| 佳 | 作 | ゼロから始める料理の世界 | 東京都立赤羽北桜高等学校 | 二年 | 古関 龍介 | 62 |
| 佳 | 作 | 働く背中を見て | 岩倉高等学校 | 二年 | 杓名 政幸 | 63 |

専修学校の部

ページ

最優秀賞 病気と共に描く未来

ハリウッド美容専門学校

一年 小島 彩佳

64

優秀賞 この腕の中の現場から

青山製図専門学校

一年 李 然

65

イラストの部

ページ

イラスト賞

世田谷区立用賀中学校

二年 山口 なな

67

令和7年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

応募校数・応募者数・入選者数の推移

作文のテーマ別応募数の割合

令和7年度作文コンクール募集要項

令和7年度作文選考委員名簿

あとがき

74 73 71 70 69 68

作文選考を通じて

中学校の部 選考委員長

世田谷区立三宿中学校長

濱川 一彦



今年度は二十五校百七十二編の応募がありました。一次審査、二次審査を経て二十六編を入選とし、その中から最優秀賞一編、優秀賞五編、佳作二十編を選考いたしました。どの作品も素晴らしく、その中から最優秀賞、優秀賞を決定することは審査員一同非常に苦労いたしました。

最優秀賞を受賞した島本結さんの「私の宝物」は、小学校低学年のころからお守りやコースターなどを手作りし、そのコースターを家族や友達にプレゼントして喜んでもらったことが原点となり、中学生で友達の誕生日に市販のコースターを購入しプレゼントして喜んでもらったが、手作りの作品をプレゼントした時より高揚感が感じられず、完成した時の「達成感」、プレゼントする時の「高揚感」、もっと挑戦したいという「意欲」全てが宝物であるとまとめています。

優秀賞の室井奏さんの「地域の人と子育て」は、家庭科の「幼児の頃と今の自分」という課題から、周囲の人々との関わり

が、今の自分を作っていると感じることができた。自分が誰かを支え、安心してもらえ、成長を促すことができる存在になれたらうれしいとまとめています。

稲川絢音さんの「大切なこと」は、地域食堂での職場体験で、食材の買い出しや具材が混ざらない工夫、きれいな色合いになる工夫、地域の方から「お弁当だけでなく、優しさを受け取っているんだよ」と言葉を受け、人のための工夫が自分自身の豊かさになっていくと綴っています。

高橋未来さんの「社会を支える裏方」は、職場体験でお世話になったカフェでは「声のトーン」「表情」「姿勢」に注意しながら接客し、チームで取り組む大切さにも気づき、自分がどんな仕事に向いているのか考えるきっかけになり、人と関わる仕事をしてみたいと思うようになったと結んでいます。

橘菌一星さんの「小さな笑顔から学んだ大きなこと」は、保育園での職場体験から、働くことへの見方が変わり、「誰かを支え人の役に立つこと」が大切だと理解できた。「将来は誰かを笑顔にする仕事に就きたい。これからの学校生活で学ぶことの意味を大切にしていきたい。」とまとめています。

鈴木理人さんの「当たり前のこと」は、鉄道会社での職場体験から、「当たり前のことをちゃんとやる」ことの大切さを学び、車いすの方や忘れ物に対する対応、挨拶や声掛けの大切さを学んだ。当たり前のことを積み重ねることが人々の信頼や安全を高め大きな成功につながるとありました。

結びに、「作文コンクール」に応募した生徒の皆さん、指導いただいた先生方、温かく見守っていただいた保護者の皆さんに深く感謝申し上げます。

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部 選考委員長

東京都立忍岡高等学校長

紺野 智恵子



今年度の作文コンクールには、高等学校の部一六〇作品、専修学校の部一四作品の応募があり、例年にも増して多くの参加をいただきました。産業教育に携わる者として、多くの生徒が自らの思いや学びを文章に綴ってくれたことは、大変喜ばしく、心強く感じております。また、今年度は、農業・工業・商業・家庭・総合学科と、幅広い学科からの応募があり、それぞれの学科での学びや体験が生き生きと描かれていたことが印象的でした。応募作品のテーマは、「私の進路、将来の夢」が最も多く、次いで「授業等を通して学び得たこと」が選ばれています。タイトルにも工夫を凝らし、具体性があり、すべてにおいて甲乙つけがたい優秀な作品でした。

選考では一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞二作品、佳作二一作品、専修学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞一作品が選ばれました。

高等学校の部の最優秀作品には都立農芸高等学校三年山田弥彦さんの「馬糞で拓く新たな魅力」が選ばれました。馬術

部で排出される馬糞を堆肥化し、環境に配慮したマッシュルームづくり挑戦するプロジェクトの様子が、研究者・自治体・農家との連携を通して情景が浮かぶように丁寧に描かれており、試行錯誤、体験的な学習を通して、持続可能な社会への貢献を感じさせる内容でした。

優秀賞には、都立橘高校四年染谷豊一さんによる、戦後でもない頃と現代の学びを対比しながら、学びの尊さを語る「私の今昔の物語」学ぶことが生きがい、また、愛国高等学校一年小久保杏葉さんの母親の働く姿、父親の入院をきっかけに看護師を志し、看護実習を通して夢を確かなものにしていく過程の中に、看護師を目指す強い意志を感じる「将来の夢」が選ばれました。

専修学校の部では社会人経験のある方からの応募作品が多数ありました。その中で、ハリウッド美容専門学校一年小島彩佳さんの「病氣と共に描く未来」が最優秀賞に選ばれました。病と向き合いながらも、ヘアメイクの道に着実に進んでいく姿が力強く描かれており、夢に向かう意志の強さが伝わってきました。

優秀賞には青山製図専門学校一年李然さんの家庭と両立させながら建築を学んでいく強い意志を感じる「この腕の中の現場から」が選ばれました。

今回のコンクールを通して、生徒一人ひとりが自らの経験や思いを言葉にする力を育んでいることを実感しました。応募してくださった生徒の皆さん、そしてご指導くださった先生方に心より感謝申し上げます。今後も産業教育のさらなる発展と、生徒の皆さんの夢の実現を心より祈念いたします。

中学校の部 最優秀賞

私の宝物

北区立明桜中学校 二年

島本 結

私は小さい頃から手芸が好きだ。図書館や本屋に並んで見る手芸についての本を読み、作り方を見ながら丁寧につっていくのが好きだった。小学校低学年の頃には自分でお守りやコースターなどをフェルトで作り、友達や家族にプレゼントしていた。一色だったフェルトが、私が組み合わせたり他のフェルトと縫い合わせたりすることで色とりどりの小物になっていくのが楽しかった。

小学校中学年になると手芸クラブに入り、布を並縫いしたり、ときにはミシンを使ったりして手提げや巾着などの作り方が少し難しいものにも挑戦できるようになっていた。お店に並んでいた布やひもを私が縫い合わせることによって日常使いできるものに変身するのが嬉しかった。そしてそれがそばにあると私が一生懸命作ったときのことを思い出し、なんとなく心が落ち着いた。

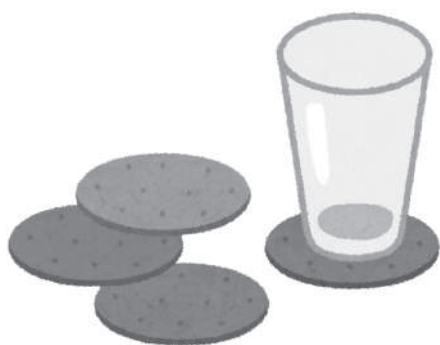
しかし、高学年になるにつれて私の興味が違うものに移り変わったことで、ほとんど手芸をしなくなっていた。また、委員会の仕事が増えたりレポートを作るなど課題の難易度が上がったことでも忙しくなり、手芸をしていないこと

を気にもとめなくなっていた。そして手芸をしない日々が当たり前になったとき、私はある店で機械で作られたであろうコースターを見つけた。

中学一年生のとき、私は友達の誕生日プレゼントを買うためにいろいろなお店を回っていた。そこでキャラクターがプリントされたコースターを見つけたのだ。そのコースターのキャラクターは友達が好きと言っていたものであり、フェルトで作ったものよりも厚みがあつてコップを置くのに最適だと思つた。私はそのコースターを買い、友達にプレゼントした。渡した時友達が喜んでくれて、私も嬉しかった。しかしなぜか私が作ったコースターをプレゼントしたときよりも高揚感を感じられなかった。そのコースターは私がいろいろな候補から悩みに悩んで決めたものだったので、もちろん喜んでもらえて嬉しかった。しかし、どうしてもあの時と同じようには喜ぶことができなかった。その時私は手作りのコースターをプレゼントしたときのことを思い出した。渡す前に「喜んでもらえるか」という不安や緊張を抱えていたけれど、渡した後の友達の「ありがとう」という一言でそれを上回る大きな喜びになったのだ。また、私のコースターを「綺麗にできている」と友達が褒めてくれたことで自信につながり、これからも手芸を続けてもっと綺麗に仕上げられるようになりたいと思つたのだ。そこで私は初めて「つくることの喜び」について理解できた。

それから私は、また手芸に熱中している。以前ほどの頻度ではないが、刺しゅうのキットを買って刺しゅう作りを楽しんでいる。確かに機械でつくるものには、実用性があつたり

手作りではできないデザイン性があつたりして、手作りより優れているというものもあるだろう。実際私が友達に贈ったコースターは、昔フェルトで作ったコースターよりはるかに使い勝手が良さそうだった。しかし私は機械でできる優れた性能よりも、人の手で作ることでしか得られない喜びを大切にしていきたい。時間がかかって完成した時の達成感も、誰かにプレゼントするときの高揚感も、もう一度作りたいと思う意欲も、私が作ったものがそばにあるという安心感も、全てが私にとって宝物である。これは機械でつくったものでは得られない喜びであり、自分で作ったときにこそ感じられる。だから私は今まで手芸と離れていた時間を埋めるように、もう一度手芸がそばにある生活を送っていきたい。そしてこれからは機械と性能を比べるのではなく、手芸をすることしか得られないたくさんの喜びを感じていきたい。



中学校の部 優秀賞

地域の人と子育て

世田谷区立三宿中学校 三年

室井 奏

「前向きに挑戦できて羨ましい。」そう言われることがある。幼い頃の私は失敗が怖かった。人に笑われるかもしれない、嫌われるかもしれないと思っていたからだ。しかし、今の私は失敗を恐れない。私を取り巻く世界には、支えてくれる人がたくさんいるからだ。

三年生になってから初めての家庭科の課題は「幼児の頃と今の自分」だった。まず情報を集めるために、一番近くで私を見てくれている母に昔と今の私の様子について教えてもらった。母によると、幼い私は今より内気で、無難な道を選ぶような子だったそうだ。でも、今は違う。私の価値観、性格を変えるような決定的な出来事があったとは思わない。しかし、思い返すと、周囲の人からの些細な声掛けや関わりの積み重ねが、今の私をつくりあげてくれたのだということに、この学習を通して気付かされた。

「あなたが地域でよく過ごす場所をあげてみましょう。そこにはどんな人が来ていますか。」「自分の家族以外に地域にいる人で、みんなに紹介したい人はいますか。」教科書に、そのような問いが載っていた。そこで思い浮かべたのは、私

が幼い頃からお世話になっっている、地域の人々のことだった。小学三年生の頃、二重跳びを失敗してしまい、自信を喪失して泣いていたことがあった。そんなとき、私を励まして「何度でも失敗していいからできるまでやってみなよ。」と言っただけで二重跳びを跳べるようにしてくれたのは近所のクラブチームの一つ上のお姉さんだ。幼い頃から私とよく遊んでくれた知り合いのおじさんは、いまだに中学校の運動会に来てくれる。かつて認識していた自分の世界は、家と学校だけだった。その狭い世界で自分は育ってきたんだと思っていた。しかし、私の世界は思っていたよりもずっと広く、地域の人々に支えられて今の自分があることに気付かされた。

外に出かけると地域の人が声をかけてくれることがある。老若男女問わず、様々だ。「身長がまた伸びたね。」とか「受験大変だけど頑張ってるね。」「いつてらっしゃい。」「お帰りなさい。」そういった何気ない一言が、私を育ててくれている。こんな風に支えて、見守ってくれている人がいるから、失敗しても大丈夫だと思わせてくれる。私には血が繋がっていないけれど、たくさん家族がいたのだ。この縁はこれから先、私が大きくなっても、結婚して子供ができて、途切れることなく繋がっていくものなんだろう。

これから先、世代や立場を問わず、様々な地域の人と関わる機会があるだろう。そうやって関わる中で、自分が心より尊敬できる人を見つけて自分の成長に繋げること、私を支えてくれる人への感謝を忘れないこと、この二つを大切にしながら、自分の世界をもっと大きくしていきたい。

また、自分が相手の人生、価値観に少なからず影響を与え

ることがあるということに留めておきたいと思う。その上で、相手の背景に想像力を働かせて、誰かを支えて、安心してもらえようかな存在になりたい。私の存在で成長を促すことができたなら、それほど嬉しいことはない。未来の中学生が、「自分の家族以外に地域にいる人で、みんなに紹介したい人はいますか。」と聞かれて考えた時、思い浮かべてもらえるような人になりたい。

大切なこと

杉並区立泉南中学校 二年

稲川 絢音

私は、職場体験で地域食堂に行きました。体験前の私は、お弁当なんて好きなものを入れればそれでいいと思っていました。そのため、私の考えたお弁当の案は、時間が経つと衛生面で不安が生まれてしまう食品ばかりでした。しかし、担当者の方に

「お弁当は自分一人で食べるものでもなく、人によってご飯を食べる場面も違う、ということをよく考えてみて」と言われ、そんな心遣いをしてお弁当を作っているということに、とても驚きました。そして、ただお弁当を作るだけではなく、作ったお弁当がどんな思いで食べられるのか、一人一人のことを考えて具材を決めることも大切だということ

知りました。

私たちは朝、食材の買い出しに行きました。その時も、お弁当に入れる食材を真剣に考えて選んでいる姿が印象的でした。お弁当を作り始めるときには手袋が渡されました。お弁当を食べて食中毒になるリスクを下げるためだそうです。正直、作業はともやりづらかったです。それにも関わらず、わざわざ手袋をつけて料理するのは、まさにお弁当を食べてくださる人たちへの思いやりだと感じました。そして、私たちができないことを責めずにゆっくりと教えてくれました。その経験を通して、私は他の人に対して「できないことやわからないことは責めずに教える」ということの大切さを改めて感じました。

その後、私たちはお弁当によって差がでないようにキュウリやキャベツなども均等に切っていました。そして盛り付けにも工夫がありました。具材同士の味が混ざらないようにカップで具材を分けていました。さらに、おかずを分けた理由はそれだけではありません。一つのおかずが傷んでしまったときにも、細かく分けていれば傷みが他の食品に移りづらいそうです。単純に見える一つ一つの物事も、全て理由があることに驚きました。そして色合いがよく見えるように、明るい色の野菜も入れていました。お弁当を作っているときに、地域の方が来てくださいました。地域の方は、野菜をおすすめしてくださいました。作業の間には、仕事をする上で大切な心得を教えてくださいました。それは、「来てくれる人全員が味だけでなく作っている人の優しさを受け取っているんだよ」というものです。野菜を持ってきてくれた方はきつ

と優しさも受け取ってくれているのだらうと思いました。この言葉を受け取った後は、お弁当を作る作業もより丁寧に優しくすることを心がけました。

やっとお弁当が完成した時、お弁当作りには人の優しさがかもっているのだと実感しました。お弁当をたくさんの人たちが受け取りに来てくれました。ありがとうと笑顔で言われたときにその優しさを受け取ってもらえた気持ちになりました。

この経験を通し私は、どんな仕事も見えない思いやりや様々な手間、努力があるということ、人とのやり取りが仕事を続ける活力になることを知りました。お弁当を作る動作の一つ一つに意味があり、思いやりがこめられていました。そしてこの経験は、人のために工夫をすることが自分の豊かさに繋がることを教えてくれました。この経験を、これからの人生のあらゆる場面で存分に生かしていきたいと思いました。

社会を支える裏方

杉並区立泉南中学校 二年

高橋 美来

私は、職場体験をする前は、仕事に対して単に「お金を稼ぐためのもの」という意識でしかありませんでした。しかし、職場体験を通して、仕事はただお金を稼ぎに行くためのものではないということを知りました。

私はカフェで職場体験をさせていただきました。私が体験させていただいた主な仕事は、テーブルの片づけ、食器洗い、料理やドリンクの提供、注文の聞き取りです。普段、自分が客として利用するときには気にしていなかった「声のトーン」や「表情」「姿勢」などにも気を配らないといけないことを知り、思っていたよりもずっと難しいと感じました。私が初めて注文を聞き取ったときは、どうすればよいか分からず、緊張して声が小さくなってしまうました。その時にスタッフの方々が「ゆっくりでいいよ」などの優しい言葉をかけてくださったことで少しずつ緊張もとけていき、安心して接客をすることができました。

料理やドリンクを運ぶ仕事では、ただ運ぶだけではなく、「どのお客さんに何を出すかをしっかり覚えること」「食器を丁寧に扱うこと」「スピードと安全のバランスを考えること」など、たくさん注意が必要だと学びました。昼頃になると、昼食を食べに来るお客さんも増え、とても忙しくなってきました。そんな中で私が慌てていた時にも、スタッフの方々がたくさんフォローしてくださり、どんなときにも慎重に、でもすばやくテキパキと行動しなければいけないと感じました。

そして、もう一つ印象的だったのは、「チームで働くことの大切さ」です。カフェでは、キッチンの人、ホールの人、レジ担当の人がそれぞれの仕事をこなしながら、常に声をかけ合って協力していました。お客さんが多い時間帯には常に連携が必要で誰かが困っているとすぐに他の人がサポートに入っていました。私は最初は自分のことで精一杯でしたが、少しずつ周りを見る余裕が出てきて、「今、あの人が困っ

ていそうだから手伝おう」と思えるようになりました。そんなとき、スタッフの方から「今の気づき、良かったね」と言ってもらえて、とても嬉しかったです。

また、お客さんにどれだけ速く、美味しい料理を提供できるかを第一優先に考え、分担してそれぞれがすばやく行動していて、毎日暑いキッチンの中でこのような努力をしていることで美味しい料理を来てくださったお客さんに提供できているのだと思うと、感銘を受けました。どの料理も一から全て作っていたり、油を使った後も最小限にゴミを少なくしていたりと、色々な工夫がなされていると驚きました。料理を運ぶ時にも笑顔でお客さんに楽しく過ごして欲しいという気持ちがとても伝わってくるため、仕事をするこの意義について改めて考えることができました。

この職場体験を通して、私は働くことの大変さとやりがいの両方を体験することが出来ました。ただ決められた仕事をこなすだけではなく、「お客さんの立場になって考えること」や「周りの人と協力すること」がとても大切だということを実感しました。普段、カフェに行くときにはリラククスして過ごしていましたが、裏ではたくさんの方が気を配りながら働いてくれているということを忘れずに利用していきたいと思いました。

そして、この職場体験は、自分がどんな仕事に向いているのかを考えるきっかけにもなりました。私は人と関わるのが好きなので、将来もお客さんと関わる仕事をしてみたいと思うようになりました。そのためにも、今のうちからコミュニケーション能力や礼儀、責任感を身につけていきたいです。

今回の職場体験は、私にとってとても貴重で忘れられない経験になりました。この経験を、これからの学校生活や将来の進路選びにもしっかりと活かしていきたいです。

小さな笑顔から学んだ大きなこと

北区立明桜中学校 三年

橘 蘭 一 星

僕は中学二年生のとき、職場体験で地域の保育園に行かせてもらった。正直に言うと、体験前は「小さい子と遊ぶくらいだろう」と軽く考えていた。しかし、その三日間の体験は、僕の考え方や価値観を大きく変える出来事になった。

初日、保育園に到着すると、子どもたちは元気いっぱいにあいさつしてくれた。最初は少し緊張していた僕も、その笑顔に助けられてすぐに打ち解けることができた。一緒に折り紙をしたり、積み木で遊んだり、鬼ごっこをしたりして過ごすうちに「子どもたちと関わるって、こんなに楽しいんだ」と思うようになった。

だが、ただ遊ぶだけが保育士の仕事ではないことも、すぐにわかった。トイレに行く子の手伝い、転んだ子のケガの対応、ご飯を食べる手伝い、お昼寝の準備、けんかの仲裁など、やることは山ほどある。保育士の先生たちは、どんな場面でも冷静に、そして優しく子どもたちに向き合っていた。しかも、ただ子どもを見守るだけでなく、その子の性格や気分、

発達の様子をしつかり観察して接しているのだということを知って驚いた。

最も心に残っているのは、三日目のお昼寝の時間だった。なかなか寝つけずにいた子が僕のそばに来て、「一緒にいてくれる？」と小さな声で言った。その子の手をそっと握っているうちに、安心したように目を閉じて眠りについた。何気ない一瞬だったが「誰かの心を落ち着かせる存在になれること」は、こんなにも嬉しいものなのかと実感した。

この体験を通して、僕の中に「働くこと」への見方が大きく変わった。体験前は、働くことはお金を得るための手段というイメージが強かった。だが、保育園での職場体験を通じて「人の役に立つ」「誰かを支える」「必要とされる」ことこそが、働くことの本当の意味ではないかと思うようになった。そして保育士という仕事には、命を預かる責任の重さと、それに見合うやりがいや誇りがあるのだと知った。

今の僕の将来の夢は、まだはつきりとは決まっていない。でも、「人と関わる」「人のためになる」「誰かを笑顔にできる」仕事に就きたいという思いが強くなった。保育士はその一つの選択肢として、今も心の中に残っている。

中学校での職場体験は、たった三日間だったかもしれない。でも、その短い時間の中にたくさんの学びと気づきがあった。今後、どんな進路を選んでも、あのととき感じた子どもたちの笑顔や、保育士の先生たちの姿勢を忘れずに、「誰かの力になれる人」でありたいと思う。そのためにも、これからの学校生活では、学ぶことの意味を大切にしていきたい。知識や技術を身につけるだけでなく、人との関わりの中で自分を高

め、成長できるような心がけていきたい。そして、いつか社会に出たときに、自分の経験が誰かの笑顔につながるような仕事をしたいと思う。

当たり前のこと

練馬区立豊浜中学校 二年

鈴木理人

「当たり前前のことをバカにしないでちゃんとやる。」

これは、七月に行った職場体験で訪問先の方が言っていた言葉で、普段からやっていることは欠かさずに、徹底的にやるという意味だそう。たええ小さな努力でも、それを毎日のように続けていけば、それが大きな成果や信頼、成功に繋がる。そのような意味を持つこの言葉に僕は心を動かされた。僕は二日間、ある鉄道会社の駅に職場体験に行くことになった。その鉄道会社は一日に六百五十万人のお客様を運び、他の鉄道会社との直通運転も多く行っている。全ての路線の長さを足し合わせると、約二百キロメートルにもなるそう。今回は、その会社のある駅の事務所で職場体験をした。

前述したようにその会社はたくさんのお客様を運び、他の会社とも関わりがあるので、体験に行く前は時間にとっても厳しい職場だと思っていた。しかし実際に体験してみても、職員の皆さんが時間よりもっと大切にしていることがあった。それは「お客様ファースト」の精神だ。お客様を一番に考え

て行動する、という心構えが色々なところに現れていると、この職場体験で僕は思った。

特に「お客様ファースト」の精神が現れていると僕が思ったところは三つある。

一つめは、多様なお客様への対応だ。当然ながら鉄道は、車椅子の方などの体が不自由な方や外国人も利用している。しかし、その方々は困ることが多い。特に車椅子の方は、電車には補助がないと乗ることが出来ない。そこでこの会社では、電車に乗りたくない車椅子の方が、アプリでどこからどこまで乗りたいかを入力して、補助してもらおうというシステムを採用している。そして事務所に連絡が来ると、補助版を持った駅員さんが急いでホームに駆けつけ、板を敷いて、車椅子の方と一緒に電車に乗り、降りる駅までついて行っていた。このように、お客様のために全力でサポートする姿が、僕にとってとても印象的だった。

二つめは、忘れ物の対応だ。この会社全体では、一ヶ月に約五万件もの忘れ物があり、今回体験に行った駅では、多い日で一日二十件の忘れ物を取り扱うそう。忘れ物を見つけたらその近くの駅と連携して忘れ物を回収し、保管所で保管する。また、その忘れ物をしたお客様が来たら丁寧に対応し、忘れ物を返す。この作業をどんなときも駅員さんは丁寧に行っていて、とても印象深かった。

三つめは、日々の挨拶や声かけの徹底だ。駅を利用するお客様一人一人に対して、駅員さんたちは必ず明るく挨拶をしていた。どんなときでもお客様の目を見て、気持ちを伝えるようにしている姿が印象的だった。最初に言ったようなこと

だが、お客様に丁寧に対応する姿勢の小さな積み重ねが、お客様に信頼を得ているのだと感じた。

このように、一日間の職場体験を通して「当たり前前のこと」を大切にして積み重ねていく姿勢がどれほど多くの人々の信頼や安全、さらには会社全体の成功につながっているのかを、改めて理解することができた。僕はこれからどんな場面、どんな危機に遭遇するのはまだ分からない。それでも僕は、一つ一つの「当たり前前のこと」を欠かさずやり、それらを丁寧に積み重ねていき、大きな成功、大きな信頼へとつなげていきたいと思う。

中学校の部 佳作

未来に活きる授業

中央区立晴海中学校 三年

樗 木 碧

「技術・家庭科という科目はなぜあるのだろうか？」学生という立場になってから、九年目にしてそう思った。将来、鉄鋼業に関わる職だとか、デザイナーだとか、インテリアコ―ディネーターだとかになりたくない人だけがやればいいんじゃないかと、そう思った。百歩くらい譲って、確かに生活を送る基本的な知識を身につけるといふ目的までは分かる。それにしても、もっと他のことに時間を割きたいというのが私の

本音だった。技術・家庭科よりも、受験で役立つ主な五教科を勉強する方が将来のための効率的な時間の割り方なのだと、そう過信していた。

そんな私を変えた人がいる。その先生は少しだけ厳しくて生徒からは距離を置かれていたけれど、私は一番その先生のことを尊敬していた。その先生が言うに、「今は何も君たちには影響のないものかもしれない。でも、一年後、五年後、十年後には、必ず必要になっていく。そして君たちは今まで学んできたことに感謝する日が必ず来る。」のだそうだ。その頃の私にはよく分からなかったが、今なら分かる気がする。

技術・家庭科は私たちの暮らしの基盤を支えてくれていて、といっても過言ではない。子どものときに身近な人が服の着方を教えてくれたのと同じで、技術・家庭科こそが家での生活に必要な知識をもたらししてくれるのだと考える。掃除するときのほうぎの持ち方や扱い方、魚のさばき方、電池を入れるときに使うドライバーの効率的な扱い方。これらの知識のすべてが今の暮らしに生きているのだと思う。私は実践的な活動を通して、「生活をよりよくしようと工夫する力」「この問題を解決するにはどのような行動が必要なのか」という課題発見、解決能力」を育むことができた。これらの能力は、私たちが将来、社会の一員として自立し、より良い生活を創造していくために必要不可欠であり、それと同時に人間が人間らしく、どんな状況におかれていたとしても、強く生きていくことのできる特別な能力なのだと考える。この能力は人生の中で一番大切であり、社会からも、求められる能力といえると私は考える。自分のもっている知識と技術を最大限に

使いこなし、そこから問題を解決していき、さらに工夫を取り入れていく。技術・家庭科は人間が生きていくうえでの本の「き」であり、よりよい生活を送る、またはこれから送っていくための、素晴らしい授業なのだと思う。

私は将来、そんな能力を暮らしに生かすことのできる人間になりたい。義務教育は中学三年生までで、学べることのできる時間は残り少なく、限られているが、私は中学校で学ぶことのできるこの時間を大切にしていきたい。それはきっと、将来の私に役立つだろうし、今の私自身がより良い暮らしをするためのカギとなると思うからだ。

だからこそ今は、暮らしをより良くできる知識や技術を学ぶことのできる授業、一時間一時間を大切にしていきたい。

感謝で繋がる世の中

墨田区立両国中学校 二年

崔 禎

「ありがとう！」そう言われて、私は感謝の大切さを深く理解することができた。

私は今年の七月の三日間、職場体験学習で献血ルームを訪問した。色々な経験をして、三日間がまるで一週間のよう長く感じた。

仕事中に献血しに来てくださるドナーさんを見ると、とても心が温まった。血液が必要な患者さんのために自分の血液

を分けてあげるとは素晴らしいことだと思ったからだ。献血はいつでも必要とされるため、スタッフの皆さんは毎日献血を呼びかける。そして、協力してくださるドナーさんから血液をいただく。そのような流れで、血液が患者さんのもとへ届くことはとても素敵に感じられた。

職場体験学習二日目、仕事は順調に行っていたのだが、ドナーさんへのカード返却に苦戦をしていた。緊張してしまい、喋るときの声が小さくなってしまふのだ。カード返却では、ドナーさんに感謝の気持ちを伝えるという大事な仕事であることを意識していたにも関わらず、声が小さくなってしまった。まるで、自分の声が誰かに操作されているようだった。二日目の活動を終了して、自宅に帰宅し、その日の活動を振り返ってみた。大体のことはうまくできていたのだが、やはり声が小さくなってしまふことが頭に引っかかってしまふ。自分に苛立ちを覚えた。ドナーさんがわざわざここまで、献血しに来てくださるのに対し、感謝の気持ちも伝えることができないなんて。そんな気持ちを抱えながら職場体験学習最終日を迎えた。

今日で私の職場体験は最後だ。今日こそは感謝の気持ちをしっかりと伝えようと心に決め、職場体験先に向かった。

「一番大切なことは感謝をすること。感謝の気持ちをしっかりと伝えることで、ドナーさんはまた献血したいなという気持ちになるんだよ。」

活動をする前、スタッフさんにそのようなお言葉をいただいた。まるで自分だけに言い聞かせられたようだった。確かに、ドナーさんはボランティアとしてこの献血ルームに来て

くださる。そしてその協力に対して、感謝の気持ちを伝えることで、献血をしに来てくださる人が増え、先述した通りの流れが成り立っている。だから、気持ちを伝えることは大切なのだ。その気持ちを伝えながら、改めて向き合った。

「ありがとうございます！」

思ったより大きな声が出た。やっとできた。その瞬間、

「ありがとう！」

自分の労働に対して、お礼を言われたのは初めてだった。ドナーさんからの気持ちに、私は強いやりがいを感じると共に、仕事をするこの本当の意味を理解できた。そして、私の心は達成感で満ち溢れた。

職場体験学習を終えて、私が一番学んだと思うことは人に対して思いを伝えることの楽しさだ。特に、感謝の意思疎通は誰かしらを幸せにする。「ありがとう」という身近で簡単な言葉でも、それはとても素敵なことだ。だからこそ、私はそんな「ありがとう」で溢れる世の中を生きたい。だからこそ、これから出会う人たちに伝えたい。「ありがとう！」



お花畑と岩の間の少女

品川区立大崎中学校 三年

山崎史織

私が父と将来のことについて話し合っていた時、父が「自分は物をつくる職業に就いていることを誇りに思っている。」と言った。父はものづくりに関わる会社で仕事をしていた、これは父の口癖のようなものだ。しかし私は常々抱いた違和感から「それってみんな同じじゃない？」と言った。父は目に見える「商品」を作るのが仕事だ。これはわかりやすい仕事だが、例えば保育士という職業だったら、親が仕事に行く「時間」をつくってくれるし、教師だったら子供の「成長」を支えている。そういう目に見えないものをつくっている仕事の方が実は多くて、でも何か大切なものをきちんと生み出している、その交換で世の中は回っているんじゃないだろうかと父に訴えた。すると父はいつものように反論せず、素直に「そうかも。」と呟いた。それがすごく、嬉しかった。

そんな、人々の創造の助け合いで成り立っているこの社会だが、私はその輪に入ることができないかもしれない。私は将来について考えあぐねていた。中学校で義務教育は終わりは高校まで行く。周りもそうだ。だがしかし、私はこれでいいのかと悩んでいた。一度きりの人生だ。やりたいことをやらなくていいのか？ それで幸せになれるのか？ と。勉強は

好きだがそこに情熱はない。私には「小説家になりたい!」という明確な夢がある。ならば……と思ったが、問題なのは給料だ。出版から安定した作家としてこぎつけられるかどうかも判らない。だから選択肢も必要だし保険も要る。今まで親に守られてお花畑のような世界と錯覚していたけれど、自分で考えて、選ぶ立場も少し経験してこの世界の景色を少しずつ霧が晴れるように知っていく。思ったより岩だらけでゴツゴツした世界で両親は私を守ってくれたのだと気付く。この世界を霧と両親の温かい手をすり抜けて私一人で歩いていく。自分で選んだ道で転んだ痛みも自分のものとして背負って生きて、自分で仲間をつくって生きていく。そうやってはじめて、大人になれたということかもしれない。私は私のために、霧の向こう側を想像しながら、今は高校へ行くために小説は趣味としてとどめようと心にしまった。

私はまだ何も知らないなあとこのことを通して痛感した。生きていくのには「お金」がかかる。そしてそれを貰うには、自分も誰かにその代価を提供しなければならぬ。それは自分の持つている能力や時間や労働力や場所、いろいろだ。誰かと誰かのその創造物の価値を、誰かから貰う価値と釣り合わせる為にお金はあると思う。それだけでなく、お金は自身の安心や自信につながり、それが良い方へも悪い方へも導く。便利は厄介と裏表だ。私は世間から付けられる「給料」という自分の価値やレッテルを気にせずに自由にのびのびと生きたい。私はまだお花畑の中にいる。でも、やりたいことで、誰かを支えたり誰かの役に立てるのは一番の幸福だと思ふ。自分の好きや得意によって生み出された作品が、誰かの幸福

を温め、その輪によって生活の営みも成立する。なんて素晴らしい。そしてこれは小説に限った話だけではなく、この世界の全ての人何かを生み出し、誰かと交換し合うことで生きている。そう思えば、霧の向こうに見えかくれするゴツゴツした岩の世界も、お花畑のような美しい、されど厳しい世界かもしれない。そんな世界を生き抜くのだから足を痛め迷いさまようこともあるだろう。でも私は、魔法やファンタジーのないこの世界で、私の物語を、見えている景色を、一瞬の感情を誰かと共有することで、貰い、与え、励まし、支えられて生きていきたい。そんな夢が、お花畑と岩の間で悩み考える少女(わたし)の、生きがい。

将来に向けての第一歩

世田谷区立瀬田中学校 二年

重 弘 結 瑞

私は以前、職場体験で、インターナショナルの保育園を訪れました。私は、あまり英語が得意ではないため、最初は外国人の先生方や英語を話す子供たちとどう関われば良いのか、どうコミュニケーションを取るべきなのか、など初めてのことがばかりで、不安に感じるものが多くありました。しかし、実際に様々な体験をさせていただく中で、多くの学びや発見、新しいものの方を得ることができました。私が職場体験を通して学んだことは、大きく分けて三つあります。

一つめは、「伝えようとする気持ち」の大切さです。私は、今回の職場体験で子供たちと遊んだり、お昼ご飯の手伝いをしたり、寝かしつけをしたりと多くの仕事に挑戦させていただきました。子供たちや先生方との会話は全て英語で、何を言っているのか分からなかったり、意味が伝わらないことがあったりと上手にコミュニケーションをとることができないことも、数えられないほど多くありました。しかし、身ぶり手ぶりや自分の知っている単語を使って、一生懸命コミュニケーションをとろうと、努力することができました。その結果、英語が話せなくてもお互いの気持ちや、思いを伝え合うことができました。私はその中で、ただ相手の国の言葉を知っていて、コミュニケーションを上手に取れる、ということよりも「伝えようとする気持ち」が大切だということに気づきました。

二つめは、「英語や異文化にふれること」の大切さです。私が訪れた保育園は、特に「人や異文化を理解し、尊重すること」に力を入れて、子供を育てる保育園でした。そのため、英語を使ったあいさつや歌、ダンス、遊びなどを通して、多くの子供たちが自然に英語に触れ、親しみ、楽しんでいることにとっても驚きました。自分も初めて、全ての会話を英語でする、という慣れない環境で、積極的に英語を使って意思疎通することができました。また、このような貴重な経験をを通して、私は言葉や文化の違いの壁を越えて、コミュニケーションをとることができるようになりました。多国籍の子供たちとふれ合う中で、違いを受け入れたり、お互いの意見を理解し、尊重し合ったりする心がどれだけ大切で、重要なことな

のか、改めて感じることができました。

三つめは、「保育士という仕事の大変さとやりがい」です。保育士さんたちは、ただ子供たちと遊んで、世話をしているだけではなく、ひとりひとりの安全を見守りながら、生活リズムや感情にも丁寧に気を配っていました。給食の時間には子供たちひとりひとりの食べ物の好き嫌いに対応し、昼寝の前には読み聞かせをして、静かに過ごせるように工夫していました。小さな変化にもすぐに気づき、優しく心をかけてあげる姿がとても印象的でした。子供たちと信頼関係を築き、成長を見守る保育士という仕事は、とても責任があり、やりがいのある仕事だと感じました。私も将来、誰かの成長を支えられるような仕事を目指したいと思いました。

このように、私は職場体験を通して、言葉や文化の違いにとらわれず、人と人とのつながりの大切さや、保育士という仕事の魅力と責任の重さを学ぶことができました。初めは、不安や戸惑いもありましたが、実際に体験することで、自分の中に新しい発見や気づきがたくさん生まれました。このような貴重な経験は、これからの学校生活や、将来の進路選びにもしっかりといかしていきたいと思います。そして、自分もいつか、誰かの力になれるような人になりたいと強く感じました。そのために、様々なことに挑戦したり、積極的にボランティア活動に参加したりして、視野を広げられるように努力していきたいです。

測定と制御く現代を支える技術く

世田谷区立尾山台中学校 三年

佐藤 レオン

私は今回の職場体験の中で、三つ学んだことがある。私たちの日常生活は目に見えない測定と制御技術に支えられている。毎朝、気持ちよく目覚めができるのはエアコンの温度設定のお陰であり、どの建物にも当たり前のように自動ドアが設置されている。中学の技術の学習の中で、現代社会に役立つテクノロジー「計測と制御」の分野に特に僕は興味をもった。そしてこれは将来、自分が技術者となった時の基礎知識を身につける重要な学習領域だと思う。

測定とは言葉の通り物理量や物の状態を数値化して表すことである。私たちの環境には室内外問わずに、温度、湿度、明るさ、音の大きさ、重さ、距離など、様々な測定の対象、物理量が存在する。これらの多様な物を測定するのは計測機器、測定機器と呼ばれ、温度計、圧力計、流量計、質量計、化学機器、物理量などがある。

工業分野では、製品の品質管理において精密な測定が不可欠である。自動車の部品製造ではわずかに数ミクロンの誤差も許されない場合があり、高精度な測定技術が要求される。医療分野では、血液検査や画像診断などの測定が行われ、これらの測定が正確でなければ、誤った診断や治療が行われるリスクがある。これらの技術により私たちはより正確で客観的な情報を得るこ

とができるようになった。経験や勘に頼るのではなく、データに基づいた合理的な判断が可能となっている。

制御技術の基本的な仕組みは「入力」「処理」「出力」の流れで表すことができる。まず、センサーによって必要な情報を得て制御装置に入力する。制御装置では、目標値と現在値を比較し、必要な調整量を計算する。そして、その結果に基づいて処理され、モーターやヒーター、バルブなどの出力装置を動作させ、システムを目標状態に近づける。この一連の流れを「フィードバック制御」と呼ぶ。授業では自動停止装置のある車が障害物の前でどのように機能するのかを学んだ。その車に内蔵されているカメラやGPS、センサーが車全体と障害物の位置確認を情報として入力、プログラムに従い、速度調節機構へと処理され、出力としてブレーキ機構のアクチュエータが働く仕組みだ。身の回りの物を例えとした学習はとても分かりやすかった。

身の回りの「測定」と「制御」の技術を組み合わせた電気機器は他にもたくさん市場に出回っている。室内乾燥室は湿度をコントロールし洗濯物が乾く仕組みとなっていたり、スマートフォン画面は周囲が暗くなると自動で明るさを下げ省エネモードに入ったりする。また、洗濯機は、洗濯物の量を検知し、適切な水量や洗剤量、洗濯時間を自動的に設定する。このような製品を見てみると測定と制御の機能を上手く使うことで必要以上の資源やエネルギーを節約でき、環境問題の解決にも役立つと感じた。

僕の亡くなった曾祖父は手先が器用で竹細工が上手かった。長さを測ることなくその日の湿度や竹の状態を見るだけ

でバランスの取れた玩具を作ってくれた。そして曾祖母は毎年、塩やシソの量は目分量で美味しい梅干しを漬けていた。化学の技術が人間の経験や勘に変わって発展することに寂しさも感じる。しかし、自分が将来、物作りに携わる立場になった時は、「誰か困った人のため」「次世代の安全な未来」「緑ある地球のため」を心に留めて取り組んでいきたいと思う。

笑顔の力

世田谷区立三宿中学校 三年

石井環太

「おはようございます」というたった一言がどんな力をもっているかを考えたことはなかった。だが、職場体験を通してその言葉の力を実感し、僕にとって大切なことを見つけられたような気がした。

僕は二年生の頃、職場体験で近所の老人ホームを訪れることになった。正直いうとあまり乗り気ではなかった。なぜなら、僕は弟がいるということもあり、子供と遊ぶことは好きだったので、保育所に行きたかった。だが、老人ホームに行くことになった。もちろん老人ホームは素晴らしい場所だと思っている。けれども、お年寄りの方との関わりはほとんどなかった。行く前までは不安と怖さで頭の中がいっぱいだった。

当日になり、老人ホームへ向かった。不安でいっぱいの中、職場体験先の方々は僕たちを温かく迎えてくれた。一時間後、

利用者の方が次々に到着された。相手は初対面でどんな人かわからない。自分は何をすれば良いかわからず動けなかった。だが施設の方々は違った。利用者の方が到着された瞬間から笑顔で挨拶、そして席まで案内する間に体調や世間話を優しく聞いたり、安全に利用できるように介護して利用者が快適に過ごせるように行動をしていた。仕事とは言えこまめで利用者を考えて行動できるのは素晴らしいと思った。なぜなら、利用者の方は不自由なく生活することが難しい方々だ。それなのに、大人数対応し、一人一人に優しく寄り添っていた。「なぜそこまで利用者の方々を考えて行動できるのですか?」と聞いてみた、そこで返ってきた言葉は、「介護の仕事は大変だけれど、利用者の方が快適に過ごしてもらえれば本当に嬉しいからね。」

僕は不思議に思った。大変なことをしているのに嬉しいということは矛盾している。だが、僕は妙に納得できた。それは利用者の方の笑顔があったからだ。利用者の方が笑顔になり喜んでいると、自然とこちらまで嬉しい気持ちになることができた。なぜこんな気持ちになったかはわからなかったが、もう一回この気持ちになってみたいと思えた。そこで僕は不安で動けなかった自分を変えようと決心した。

翌日、利用者の方が到着された。でも、昨日とは違い足を動かした。そして、挨拶を試してみた。すると利用者の方から「おはようございます」と笑顔で元気な声が帰ってきた。この時思わず「えっ」と言ってしまうくらいに衝撃を感じた。たった一つの挨拶で人を笑顔にすることができた。そして、ここまで挨拶が温かく感じたのは初めてだった。その

後、利用者の方とお話しする機会があった。初めて会った人と話すことは難しかったが、できるだけたくさんのことを質問した。趣味や昨日の出来事などを質問していると、利用者の方はみんな嬉しそうだった。すると、僕もとても嬉しい気持ちになった。本当に行きたかったのは幼稚園だ。最初は不安いっぱいだった。なのに、僕が大好きなゲームやサッカーで、今までできなかった技ができるようになったときやゴールを決められたときとは違い、今まで経験したことのない喜びを味わえた。この時に確信した。「相手に寄り添い、笑顔にして幸せにする。」このことが自分にとって一番の喜びであるということだ。

職場体験を通して本当に大切なことに気がつくことができた。だが、これをどう活かしていくかはわからない。他人を笑顔にすると言っても方法はたくさんある。自分が好きなゲームやサッカーで有名になって、誰からも憧れるヒーローのような存在になったり、先生やカウンセラーになって誰かの笑顔を守ったりするのも良いと思う。どんな将来になったとしてもあの経験は大きな糧となるだろう。そして僕はあの時の「おはようございます」という一言の暖かさと、笑顔を忘れない。



「見えない努力」に気づいて

世田谷区立三宿中学校 三年

岩佐虎徹

母のすごさに気づいたのは、ほんの最近のことだ。それまでは、毎日の生活が当たり前のように過ぎていき、その背景にある「見えない努力」には目を向けてこなかった。だが、自分で家のことを少しずつ手伝うようになり、初めてその偉大さを実感するようになった。

朝、まだ眠気の残る布団の中でまどろんでいる間、母はすでに一日の支度を始めている。お弁当作りに朝食の準備。毎日、温かいごはんが用意されているのは当然のように思っていたが、その「当然」がどれほどの手間と気遣いに支えられているのか、考えたこともなかった。

学校から帰宅すると、部屋はきれいに整い、洗濯物はたたまれ、夕飯のいい匂いが漂っている。お風呂も用意されている。今まで何の疑問もたずに受け入れていたこの光景も、すべて母の手によって成り立っていた。何気なく過ごしていた日々は、母の存在によって支えられていたのだと気付かされた。

ある日、学校の宿題で「家の手伝いをする」という課題が出た。正直なところ、少し面倒に感じながらも、食器の後片付けを手伝うことにした。食器を運び、洗い、拭いて、しまう……ただそれだけの作業なのに、思いのほか時間も労力も

かかった。そして、これを毎日、何年も続けている母の姿を思い浮かべ、胸が熱くなった。

母は、誰に頼まれることもなく、誰に褒められることもなく、黙々と家族のために働き続けている。決して目立つことはないけれど、その存在は確かに僕たちの暮らしの土台となっている。

母は家事だけをしているわけではない。僕の様子がおかしいとき、無理に話を聞き出すこともせず、ただ静かに寄り添ってくれる。以前、学校で嫌なことがあり、気分が沈んだまま帰宅したことがあった。何も話す気になれず黙っていると、母はただ「おやつあるよ」とだけ声をかけてくれた。その何気ないひと言が、どれほど心を軽くしてくれたことか。母は、僕の気持ちを言葉ではなく心で受け止めてくれていたのだと思う。

母は、「がんばりなさい」と言葉で励ますことはほとんどない。でも、毎日を丁寧に生きる姿を見ていると、「頑張るとはこういうことか」と自然に思える。言葉ではなく、行動で伝えるその背中が、僕にとって何よりの教えとなっている。母が日々、どれだけ時間とエネルギーを家族のために費やしているのか。それに気づいたとき、感謝の気持ちがあふれてきた。母がいなければ、今の自分の生活は成り立たない。そう確信している。

それでも母は、自分の努力を「当たり前」として受け止め、疲れた顔ひとつ見せずに「おかえり」と笑ってくれる。そんな母の姿に、これからはもっと気づいていきたいし、感謝の気持ちもきちんと伝えていきたい。

母は、決して派手なヒーローではない。でも、僕にとっては何よりもかっこいい存在だ。家族のために、見えないところで努力を重ねている母に、心から「ありがとう」と言いたい。そしていつか僕も、誰かのために自然と力を尽くせるような人間になりたいと思っている。

ここに生きる私たち

世田谷区立三宿中学校 三年

小松 ゆり

中学校に行ったらたくさんさんの友達がいて、外に出たらたくさんさんの社会人がいる。そんな光景を見て、誰もが「当たり前」だと思ってしまう。貧しい人も裕福な人も、能力がある人もそうでない人も、みんな「出産」という出来事を経ているに存在している。自分が今ここに存在しているのも、母が私を産んだからだ。自分がいるのもみんながいるのも普通のことだと思ってしまうが、この「出産」とは想像する以上に辛く、過酷なものである。これに気づくきっかけであったのが、家庭科の「命を育む、親になるとはどのようなことか」という授業だった。

母親は出産するまでの妊娠中、お酒や塩分を控えたり、重いものを持たないようにしたりと、様々なことに気を遣わなければいけない。また、イライラしたり、気分が落ち込んだり、涙もろくなったりと、精神が不安定になることもあるそ

うだ。私はそのことを聞き、時々電車やバスで見かける妊婦さんのことを思い出した。妊婦さんたちは、何も辛そうな顔などせず、ただ平然と立っていることが多い。そして席を譲ろうと声をかけても、断られてしまうことだってある。私は席を譲ろうと思っても、なかなか勇気が出ないまま、いつも「まあいっか」で終わらせてしまう。しかしこの授業で私は、席を譲ろうと声をかけることはただ妊婦さんの体の負担を減らすためだけでなく、心の負担を減らすためでもあると気づいた。もしその言葉を受け入れられたとしても、断られたとしても、どちらの場合も必ず相手を思いやっていることは伝わる。私たちの一つ一つの小さな気遣いが、妊婦さんの心の支えになるのではないか。妊娠中、どうしても母親だけに負担がかかってしまいがちだが、だからこそ周りの人たちは自分のできることを積極的に見つけ、少しでも母親が過ごしやすい環境を作っていくべきだと思う。また、母親や妊娠についてちゃんと理解し、時には察することも必要だ。母親の心にちゃんと寄り添って臨機応変に対応することも、安心できる環境を作り出す一つの方法だと思う。妊娠中、特に心が安定しづらい時期だからこそ、私たちは色々と考えて接していくべきだと思う。

また、妊娠中だけでなく、出産やその後もとても大変である。出産では、これまでの人生の痛みとは比べ物にならないような、ものすごい激痛が走るらしい。私の母は、その痛みに耐えられなくて途中から人工呼吸器で呼吸したそうだ。そんな中増えているのが、「立ち会い出産」である。立ち会い出産とは、出産時にパートナーや家族が分娩室に入り、みんな

なで出産に立ち会うことだ。赤ちゃんが生まれるまでの時間を一緒に過ごすことで、母親の痛みを和らげ、不安を軽減することができるらしい。この先出産が待っている人たちは、母親の気持ちにも合わせながら、この立ち会い出産をするかどうかをしっかりと話し合って決めてほしい。

そうして無事に赤ちゃんが生まれると、次には「産後うつ」になってしまう人も一定数いる。その割合は、十人に一人いるそうだ。そのような時こそ、一緒にいるパートナーや家族がサポートすることが大切だ。今の時代、育児は母親の仕事ではなく、みんなが協力しあって乗り越えるものだ。母親は一人で抱え込まず、ぜひ周りに気軽に頼ってほしいと思う。

今回の家庭科の授業を経て、出産やその前後がどれだけ大変かがわかり、今何気なく過ごしている日々も父や母の苦勞があつてのものだとものすごく実感した。今自分が健康でここに存在するのも、周りの人が存在するのも、父や母など身の回りの人が努力してくれたからであり、当たり前前のことではない。だからこそ、この自分の人生を無駄にしないよう、一生懸命、精一杯生きていこうと思う。そしていつか私も、自分だけでなく周りの人の心の支えとなるような存在になりたい。



家庭科が与えてくれたもの

世田谷区立三宿中学校 三年

寺嶋 郁乃

「好きな教科は何？」きつと学生ならされたことがある質問。この質問をされたとき私はずっと「特にない」と答えていた。しかし、ある出来事をきっかけに「家庭科が好き」と答えるようになった。

私は小さい頃からのづくりが好きだった。時間があれば、工作や折り紙をしていた記憶がある。小学校に入った頃からは、手芸をするようになった。なかでも、刺繍はとても好きだった。下書きに沿って一針ずつ縫うことで完成に近づいていく様子や、完成した時の達成感が好きだった。だから家庭科の授業で手芸ができると知って家庭科が楽しみになった。しかし、家庭科の授業は手芸だけではない。家庭科の授業には、手芸の他にも調理実習を含め初めてのことが多くあった。当時の私は、料理などほとんどしたことなかった。強いて言えば、母の料理の手伝いでミニトマトのヘタをとるとか、クリスマスケーキの飾り付けをしたとか、とても料理と呼べるようなものではなかった。実を言えば一度だけ、小学校に入学したばかりの頃に、母の手伝いで包丁を使って食材を切ったことがある。しかし、その時に指を深く切ってしまった。それ以来、包丁も料理も怖くなり、母の手伝いさえもや

らなくなつた。

それでも、調理実習にはとても興味を惹かれた。友達と一緒に料理をして、一緒に食べる。それがとても楽しそうに思えたのだ。そして「友達となら料理も怖くない」と感じたのだ。しかし、調理実習はなかなかできなかった。理由は新型コロナウイルスの感染拡大だ。私は、とても悲しかった。怖く感じていたはずの料理だけど、楽しみにしていたのだとその時に気づいた。そんな時、悲しんでいる私を見た母は、「また一緒に料理をしてみる？」と提案してきた。私は、少し迷ったが「今ならできるかもしれない」と母と一緒に料理をすることにした。

料理をする日、私は母に何をすべきか尋ねた。私は以前のように、「材料を洗ってほしい」や「焦げないように見て」と言われると思っていた。しかし母は私に「これを切ってくれる？ 切り方は任せるね」と言った。私は驚いた。授業で食材の切り方について学びはした。しかし実践などしたことがあるはずもない。包丁で怪我をして以来包丁を触ることなどなかったのだから。そんな私に、母は食材を切るように言ったのだ。母はさらに「無理はしないでいいよ。わからなかったら聞いてね」と言った。私は恐る恐る包丁を持ち、食材を切り始めた。慣れない手つきで少しずつ、母に助言をもらいながらも、ゆっくり進めた。食材を切り終えてからはあつという間だった。食材を味付けして、炒める。そうしてできた夜ご飯。いざ食べてみると、想像よりも美味しく感じた。決して上手ではない不格好な形の食材でもいつもより美味しく感じたのだ。私は自分で作ることでこんなに美味しく

感じられるものかと感動した。

私はこの出来事をきっかけに料理が趣味になった。あの感動の影響で料理への恐怖はもう消えていた。料理が趣味になったことで母と過ごす時間が増え、母との会話も多くなった。おかげで、母と今まで以上に仲良くなれたように感じる。料理は私にとって怖いものから、母と私の絆を深めてくれる大切なものに変化していた。最近は、料理ではなくお菓子を作ることが多くなった。作ったお菓子は休日に家族のみんなで食べている。そのおかげで、家族での会話も増えた。数年前のあのとき調理実習に興味をもたなければ、母と料理をしなければ今こんなに家族と会話することもなかったかもしれない。そう考えると料理が、そして家庭科が私に与えてくれたものはとても大きい。だから私は好きな教科について聞かれたとき、「家庭科が好き」と答えるのだ。

未来を育てる裏方

世田谷区立三宿中学校 三年

野津歩花

私の母は保育士だ。それもあってか私は人一倍小さい子と遊ぶことが大好きだったが、職業に保育士を選ぼうと思ったことはなかった。山積みの仕事と園児の命を預かる責任とがのしかかっている上、給与は少なく休みも取りづらいと言うことを知っていたからだ。そのため、「保育士って大変じゃない？」と母に聞くと、母は「それ以上のものがあるよ。」

と答えたが、その時の私はしっくりこなかった。

しかし、その言葉の意味を学べた出来事があった。保育園での職場体験だ。仕事量の多さは想定以上だったが、私の知らなかった保育士の姿が見えたのだ。

テラスで遊んでいた時、順番を抜かしてしまった子がいた。見ていたのは私だったが私は最初に急に叱ったら怖がられてしまいかと思い、何もできなかった。すると、保育士さんが来て、話し合いをしていた。私はその時、一歳児と話してもわからないと考え、注意する選択肢しかもっていなかった自分をとても後悔し、話しあう保育士さんの真剣さに胸を打たれた。園児を小さい子として見ず、一人の人間として向き合う、その子の将来のために良くないことをしたら伝える、それが当たり前に行えることに感動したのだ。

部屋で木の実を使った制作をしていた時には、一歳の子にはボンドは難しく机や床についてしまっていた。ところが保育士さんは「なるべく自分でやらせてあげて。」と言って見守っていたのだ。忙しい中、片付けの多い制作をして、自分でできるよう見守る様子は自分は苦労してでも園児に成長してほしいのだと伝わってきた。

三日間の職場体験はあっという間に終わり、帰る挨拶をする時になった。園児に思い入れが強くなっていった私はとても寂しかった。大きくなっていくのを見守れる保育士という仕事に羨ましいと感じたが、彼らもこの子たちが卒園したら会えないことに気づいた。三日間の職場体験でさえこんなに思い入れが強くなるのだから、保育士さんたちは想像もできないくらいの思いが園児にあるだろう。その上数えきれないく

らの成長を助けている。自分たちが称えられなくても園児の成長のために尽力できるのかと彼らの愛情深さに驚いた。

子供と向き合い、子供のために行動してその子たちを成長させるのは社会の未来をつくることだと思った。それが、母の言っていた大変さ以上に得られるものなのだとは考ええる。「未来をつくる」というのは人のためであり、自分が得られるものではないと考える人もいるかもしれない。でも今まで述べたことから分かるように保育士さんたちは園児に深く愛情をもち、園児の成長が喜べるから園児たちの未来を作れることに価値を感じられる人たちなのだろう。

母の言葉の意味についてわかり、今日も毎日保育園で子供と向き合っている母を尊敬し感謝したいと思った。そして自分も、目立たなくても誰かのいつかのために頑張れる仕事に就きたい、そこから幸せを感じることでできる大人に成長したいと思った。

職場体験で学んだ大切なこと

杉並区立泉南中学校 二年

柳田 よつば

今回の職場体験を通して私は「働くことの大変さ」と「人と関わることの大変さ」を学ぶことができました。

私はスーパーマーケットで体験をさせていただき、そこで品出しや、値札つけなどの仕事をしました。最初は「簡単そ

うだな」と思っていました。実際にやってみると予想以上に体力も必要で、難しかったです。

特に大変だったのは品出しです。品出しは商品を棚に並べるだけのように見えますが、実は商品の並べ方や向き、順番が決まっています。そのため、間違えると直さなければなりませんし、お客さんが通る通路で作業をするので、邪魔にならないように気を配る必要もありました。ただ単に品出し作業をするだけでなく、周りをよく見て動くことが大事だと感じました。

値札をつける作業では、想像以上に集中力が必要でした。値札の位置が少しでもずれると見づらくなるため、真っ直ぐ貼るように意識しました。また貼る前に商品名や価格が正しいかなどを必ず確認する必要がある、一度でも間違えるとやり直しになるので、丁寧さと正確さが同時に求められました。値札を貼り終えた棚がきれいに揃って見えると達成感がありましたし、自分の作業したものが売り場の見やすさにつながっていると感じてうれしくなりました。また、自分が値札貼りをした商品が棚に並べられて、お客さんに買ってもらうときはとても嬉しかったです。とても集中力が必要で、「もうやりたくない」と思うほど大変な作業でしたが、「疲れたけど集中して作業に取り組んでよかった」と思いました。これは職場体験がなければ、感じられなかった達成感だと思いました。

職場ではそれぞれの方が一人で仕事をしているように見えても、実際は多くの人が協力し合って成り立っているということも知りました。品出し担当やレジ担当、清掃担当などそ

それぞれの役割があつて、チームワークの大切さを実感しました。私は職場体験を通して「働く人への感謝の気持ち」が強くなりました。スーパーで買い物をするときも「この商品を並べてくれる人がいるんだ」と、見えないところで働いている人のことを思えるようになりました。それは職場体験をしなければ気づけなかったことです。

今回の職場体験では接客をすることはありませんでしたが、どんな仕事もお客さんが買い物をしやすい環境を作るために欠かせない仕事だということ学びました。接客などの表に出る仕事だけでなく、裏方の見えないところで支えてくれている人たちがいるからこそお店は回っています。この経験は将来どんな職場でも生かせると思いました。

職場体験を終えて、私はただ作業するだけでなく周りを見て思いやりをもつことが大切ということに気づきました。責任をもって正確にやり遂げることや周囲への気配りが必要だということを知りました。将来どんな仕事に就くとしても、今回学んだことを忘れずに、働く仲間やお客さんに感謝しながら仕事をしていきたいと思えます。そして、今までは当たり前だと思っていた日常が実は多くの努力で成り立っていることを周りの人にも伝えていきながら、この経験を思い出して、身の回りの一つ一つのこと丁寧に取り組んでいきたいです。

家庭菜園の楽しみと喜び

北区立稲付中学校 三年

松本 諒

みなさんは、家庭菜園というものを知っていますか。自宅の庭やベランダで野菜や果物などを趣味やレクリエーションの目的で、軽易かつ小規模に栽培するのが家庭菜園です。畑のように広い土地がなくても、プランターや鉢を使えば誰でも簡単にはじめることができます。

家庭菜園の一番の楽しみは、育てている野菜や果物が育っていくことを目に見えて実感できるとともに、自分の手で育てたものを食べられることです。スーパーで買う野菜よりも形がいびつだったりすることがありますが、新鮮なものをその時に食べることができたり、「自分で育てた」という特別な味わいを楽しむことができます。家庭菜園以外でも、自分で料理したものを食べたときは、誰かに作ってもらっているときよりも味が美味しく感じるのではないでしょうか。うか。

以前から家庭菜園について興味をもっていました。が、なかなか行動に移せず、できていないままです。しかし、とある理科の授業で有性生殖や無性生殖について学んでいる際に、先生がさつまいもを持ってきて「苗を欲しい人はいますか」と私たちに聞きました。家庭菜園ができるいいチャンスだと思った私は、迷いなく手を挙げてその日から家の庭で

育てることにしました。苗の植え方や水やりの頻度などについても調べて、毎日学校から帰ったあとに、水やりをするようにしました。新芽が生えてきてぐんぐん成長するようになり、水やりのタイミングで成長を確認することが一日の楽しみにになりました。

そして、技術の時間でも自分でかいわれ大根を種からまいて育てるという授業をするようになり、夏休みにはかいわれ大根とさつまいもを育てる同時並行のような形になりました。私はかいわれ大根が好きで以前からマヨネーズを付けて食べていたため、自分で育てられることを知ってとても嬉しくなりました。計画を立てて、たけの長さは何センチくらいにするのか、葉の色は何色にするかなどを決めてそれに合った世話をするようにしました。かいわれ大根はさつまいもも育て方と打って変わって、ほとんど日当たりを避けて育てます。そして、かいわれ大根は他の作物に比べて短期間で育てられるため、約二週間ほどで食べることができ、僕は冷やし中華に添えて食べたり、マヨネーズをつけて食べるようにしました。

さつまいもは育て途中ですが、これらの栽培を通して感じたのは、「ものを育てること」の楽しみと喜びです。買ってきた野菜を食べるのは違い、自分で世話をした分だけ愛着が湧きます。そして、家族と自分が作ったものを食べたときに「美味しい」と言ってくれるのも、ものを育てる上でのやりがいであると思います。苗を植えた頃は本当に育つのだろうかと半信半疑でしたが、今では「この土の下に大きなさつまいもが育っている」と思うと、秋頃になって掘るのがとても

も楽しみで、収穫したときには更に達成感が味わえるだろうと思います。そして、さつまいもが終わったあとにもトマトやじゃがいもなどの様々な作物にもチャレンジしていきたいと思っています。

実際に自分で苗を植えたり、水やりをして世話をし、成長を見守ると食べ物ができあがるまでに多くの時間や手間がかかることもよく分かりました。そのため、普段当たり前に食べているものがありがたさや作っている人の大変さについても実感することができました。これからは、それらに対して感謝の気持ちをもって食べていきたいと思えます。

職業体験で学び得たこと

北区立明桜中学校 三年

日名子 恵 実

職場体験で私は、保育園に行くことになりました。保育士の仕事は、自分が思っていた以上に大変で難しい職業だと知りました。実際に自分で保育士を体験してみても学んだことや難しいと感じたことが多くありました。

学んだことの一つめは、とにかく笑顔でいることです。幼い子に限らず、人間だれしも目つきが悪かったり、真顔でいる人より、笑顔で明るい人の方が話しかけやすいと思います。加えて、幼い子はよく周りの人の顔や行動を見てみると普段町を歩いていて思うので、仲良くなるにはより笑顔を欠かさ

ないことが大事だと思いました。園児と接している周りの先生を見ていても笑顔でいることが多いし、園児をほめたり、絵本を読んであげている時は、びっくりにした顔や感動した顔など色々な感情が相手に伝わるよう表情豊かに接しているのが気持ちよさを表情や行動に表すことが大事だと思いました。

二つめは、幼い子の視線に合わせることです。初めて話す子に立って話しかけたら遊びに夢中であまり話してくれなかつたけど、相手の視線に合わせて話しかけてみたら、視野に入ったのか遊びに加えてくれたり、今何をしているのか、どんなことをするのが好きなのかなど、どんどん色々なことを話してくれるようになりました。

難しいと思ったことの一つめは、目の前でけんかをしてしまった子たちの止め方です。自分と年代ではないし、身内の子でもないのどう声をかければ良いか、自分が声をかけて泣いてしまったらどうしようかと色々不安が頭に浮かび何もすることができませんでした。その時は、すぐそばに先生がいたので先生が少し声をかけてけんかが止まりました。ただ怒ったりするのではなく、「こうした方がよかたんじゃなかな。」などプラスな言葉づかいを自然に使ってほしいと思いました。

二つめは、一人ひとりの色々な特徴を覚えることです。名前はもちろん、その子は何をして遊ぶのが好きなのか、どうすると寝つきやすいかなど一人ひとりの細かい特徴を覚えるのが大変でした。数人の子の名前は覚えられましたがどんなことを遊ぶのが好きなのかなど細かいことは、頭がこんがらがって覚えきれませんでした。

私は職場体験で多くのことを学べたし、発見もたくさんありました。三日間しか体験をしていないけれど、自分にとつととても勉強になりました。自分が思っていた以上に覚えることが多いし、身体的にもとても疲れる大変な仕事でした。ですが、園児が健康でいられるよう玩具の消毒をしたり、園児が楽しめるよう本の読み聞かせの時間を作ったり、画用紙やペットボトルなどの材料を使って工作をしたりと園児の健康を守り、笑顔を増やすとても魅力的な仕事であると感じました。それと同じに、いつも身の周りで私たちの学校生活を支えてくれている学校の先生に感謝の気持ちでいっぱいになりました。普段の先生の話も聞いていても私たちが下校してから夜遅くまで仕事することがあるらしいので、教師の仕事は大変だと思っていました。保育士の仕事を私たちが普段下校する時間まで体験しただけでもとても疲れたのにそれに加えて何時間も仕事をしていると考えるとよりありがたいと思ったからです。

これからは、より家族や学校の先生に感謝して職場体験で得たことを生活の中で生かしていこうと思えました。



職場体験で学んだ「働くことの喜び」

足立区立第十二中学校 二年

村山 明花莉

私は、職場体験学習で三日間、保育園に行きました。初めて「働く」ということを意識した経験であり、同時に「働くことの喜び」について深く考えるきっかけになりました。

保育園に入った最初の日、私はとても緊張していました。小さい子どもたちとうまく接することができるのか、不安でいっぱいでした。ところが、いざ園児たちと遊んでみるとみんな楽しそうに遊んでいたりと、元気に声をかけてくれたりして、その笑顔を見て、少し緊張がほぐれました。

最初に任されたのは、お庭での遊びの見守りでした。おままごとをやったり、鬼ごっこの相手をしたりと、子どもたちと一緒に体を動かしました。一時間ほどでしたが、思った以上に体力を使いました。保育園の先生方はこれを毎日続けているのかと思うと、その大変さを実感しました。しかし、子どもたちが楽しそうにしていると、疲れもなくなって、私も楽しく笑顔でできました。

二日目は、給食の配ぜんを手伝いました。食器を並べるこの一つでも、子どもたちの人数を考えて、こぼさないように注意しながらやらなければならず、たくさん気をつかいました。ですが、保育園の先生が「落ち着いてやれば大丈夫」と声をかけてくださり、少しずつ慣れていきました。食べ終

わった子どもたちが「おいしかった」と笑顔で言うのを聞いたとき、自分がかかわったことで、子どもたちがうれしい気持ちになれたんだ、と思い、うれしかったです。

三日目は、お昼寝の準備を手伝いました。ふとんを並べるのは単純な作業のように見えたのですが、子ども一人ひとりのふとんの場所が決まっていて、最初はあせってしまいました。くり返すうちに少しずつスムーズにできるようになりました。子どもたちが静かに眠っていく様子を見ると、自分のした仕事小さくても役に立っていることを実感しました。

この三日間を通して、私は働くことの大変さと喜びを感じました。働くことは、ただ作業をすることではなく、人の役に立ち、その人の役に立って、その人の生活や心を少しでも支えることだと思いました。子どもたちの笑顔や「ありがとう」の言葉は、私にとって何よりもうれしかったです。

また、保育園で働いている先生方を見て、「働く」ということは知識や体力だけでなく相手を思いやる心が必要なのだと学びました。子どもが泣いてしまったとき、保育園の先生方はすぐにかき寄ってやさしく声をかけていました。その行動を見て、私はただ見守るだけでは足りないことを知りました。相手の立場に立って考えて行動することが、本当の意味での「働くこと」につながるのだと思いました。

今回の職場体験を通して、私は「働くことの喜び」が、誰かの役に立ち、その人の笑顔や安心につながったときに感じるものだと考えるようになったと思いました。そして、働くことは自分を成長させる機会でもあると思いました。最初は

うまくできなかつたことも、何度かやるうちに少しずつできるようになったとき、自分が成長しているのを実感することができました。

私が本格的に働くようになるのはまだ先のことですが、この経験を通して、働くことは大変なこと、そこに必ず喜びがあることを知りました。将来は、自分の得意なことや好きなことを生かして、誰かを笑顔にできる仕事をしたいと思えました。そして、そこで「働くことの喜び」をたくさん感じられるようになりたいです。

職場体験を通して

江戸川区立小松川第二中学校三年

勇田果穂

障害者生活介護施設での職場体験は、私にとって非常に貴重な経験でした。この施設は、重度の障害のある方々が日々通い、支援を受けて生活を支え合う場所です。ここでの体験を通じて、私は自分の人生観や心構えに大きな影響を与えられました。

初めてこの施設に足を踏み入れたとき、私の中には不安と期待が入り混じった気持ちがありました。施設内は明るく、落ち着いた雰囲気、スタッフの方々が温かく迎えてくれましたが、私が最初に感じたのは、障害のある方々との接し方についての不安でした。私は彼らの特別なニーズや、どのよ

うに接して良いのか分からず、戸惑っていました。

しかし、職場体験を通じて、私はその不安はだんだんと解消されてきました。障害のある方々は、それぞれが個性をもった一人の人間であり、利用者さんも他の人と同じように笑ったり、怒ったり、悲しんだりすることを実感しました。言葉でのコミュニケーションが難しい方もいましたが、表情やジェスチャー、視線で感情を伝え合う姿を見て私は、言葉だけがコミュニケーションの手段ではないことに気付かされました。

この施設での体験を通じて、支援の重要性を強く実感しました。施設のスタッフは、障害のある方々が安心して過ごせるように、個々の状態に合わせたサポートをしています。その姿勢は非常にプロフェッショナルで、ただの「仕事」としてではなく、真剣に利用者一人一人の生活を支えようという強い思いが伝わってきました。

私が体験した活動の一つは、利用者の方々と一緒に軽い体操を行うことでした。最初はどれほどのサポートが必要なのか、どれくらいのパースで進めるべきなのか、戸惑いました。しかし、スタッフの方が、利用者の反応を見ながら無理なく進めていく様子を見て、支援の大切さを実感しました。支援をするということは、相手の状態をしっかりと理解し心から寄り添うことだと気づきました。この経験から、私は「共感」という言葉の本当の意味を深く考えるようになりました。障害のある方々が自分の思いをどう伝えたいのか、利用者さんの方々がどんな支援を求めているのかを理解することが、最も大切なことだと感じました。また、支援をする側としても、

自分の感情や思いを押し付けず、相手のペースに合わせることが大切だと思いました。

この施設での経験を通じて私は、「挑戦」や「前向きな心」の重要性についても深く考えるようになりました。障害のある方々は、日常生活の中で多くの困難に直面しています。しかし、その中でも、利用者さんは常に前向きに努力している姿が印象的でした。たとえば、手先が不自由な方が、一生懸命にパズルを組み立てたり、体を動かしてリハビリを行ったりする姿を見て、私は大きな勇気をもらいました。逆に、私は自分が少し困難に直面するとすぐに諦めたり、投げ出したりのことが多かったことに気づきました。この施設での体験を通じて、どんなに小さな挑戦でも前向きに取り組み、諦めずに続けることの大切さを学びました。どんなに難しい状況でも、前向きな心をもつことで、少しずつでも進んでいくということを教えてもらいました。

障害者生活介護施設での職場体験は、私にとって大きな人生の転換となりました。障害のある方々と触れ合い、支援の重要性を学び、前向きな心で挑戦を続けることの大切さを実感しました。この経験をを通じて、人としての思いやりや共感の大切さを深く理解できたことは、私にとってはかけがえのない宝物となりました。これから、この施設での経験を忘れないように、人との関わり方や支援のあり方を考えていきたいと思えます。そして、どんな状況でも前向きに挑戦し続けることを大切に、他者と共に支え合いながら成長していけるような人間でありたいと思います。

気づいた夢

江戸川区立小松川第二中学校 三年

坂口 真央

「将来、どんな職業に就きたいか。」この問いに、今の私は答えられない。幼い頃の私は興味をもったものを「夢」としていくらでも挙げるようになってきた。しかし、中学生になり将来を真剣に考えるようになった今では、この問いは単なる憧れや好奇心だけで簡単に答えられるものではなくなっている。そんな私が改めて将来について考え始めるきっかけとなった出来事が、去年の冬に行われた職場体験である。私はキリスト教保育を行っている幼稚園で、四日間お世話になった。

幼稚園での一日は、玄関の掃除から始まる。その後は先生方と一緒に聖書を読み、子どもたちを迎える。礼拝をしたり、一緒に遊んだり毎日がとても新鮮だった。さらに絵本の読み聞かせをする場面もあった。最初は緊張したが、一生懸命に耳を傾けてくれる子どもたちの姿を見て、とても嬉しく温かい気持ちになった。こうした一つ一つの関わりを通して、先生という仕事子どもたちの成長を支える大切な役割を担っていることを実感した。

二年生の時に興味のある職業についてレポートを書く学習があった。そのとき、いろいろな仕事について知り、「働くこと」そのものに関心をもつようになった。しかし、詳しく調べれば調べるほど、どの仕事も大変そうだという印象ばかり

りが残った。実際に幼稚園での体験も決して楽なものではなかった。だが、不思議と「大変」という思いよりも「楽しい」という気持ちの方が大きかった。先生方が常に笑顔で、仕事を心から楽しんでいる姿を間近で見られたからだろう。

私はこの職場体験を通して一つの決意をした。それは「自分が心からやりたいと思えることに挑戦する」ということである。本当にやりたいと思えることなら、辛いことがあっても乗り越えられる。幼稚園で出会った先生方の姿は、私にその大切さを教えてくれた。

だからこそ、今からさまざまなことに挑戦し、自分の可能性を広げていきたい。将来、保育の道に進むかどうかはまだ分からないが、人を支えることの喜びや、働くことの大切さを知った経験は、どんな進路を選んでもきつと役に立つだろう。この体験を通して得た学びを、これからの学校生活の中でも生かしていきたい。

さらに、この職場体験は、私に「働くことの意味」について考えさせてくれた。働くとは、自分のためだけでなく、誰かの笑顔や成長を支えることだと気づいた。幼稚園の先生方のように相手を思いやる気持ちはどの仕事においても大切だと思う。働くことは、社会に必要な役割を果たし、誰かの生活や笑顔につながるものだと理解できた。この学びを胸に、私はこれからの生活でも一つ一つの挑戦を大切にし、今から社会の一員として胸を張って生きていけるようになりたい。

「将来どんな職業に就きたいか。」この問いに今の私はまだ答えられない。だが、「将来の夢は何か。」と問われれば、今の私にも答えられる。それは、諦めずにいろいろなことに挑

戦し、誰かを笑顔にできる大人になることだ。

私の将来の夢

江戸川区立小松川第二中学校 三年

庄 司 桜 子

私の将来の夢は看護師になることだ。まだ具体的には決まっていないが医療の道で誰かの役に立ちたいという思いが強くなる。この目標を抱くようになったきっかけは幼い時の入院経験だ。

私は五歳の時、喘息で入院したことがある。親は見舞いに来てくれるものの仕事で忙しいため一日中は会えなかった。初めての入院かつ普段とは違う生活にまだ幼かった私はとても心細く、寂しさを感じていた。そんな時に支えてくれたのは看護師の方だった。夜中、一人でトイレに行くのが怖い時にナースコールで呼べば付き添ってくれたり、慣れない場所でも緊張している私に積極的に話しかけてくれたりした。そのおかげですっかり緊張は解け、前向きに過ごせた。忙しい中でも笑顔で優しく接してくださった看護師の方には今でも感謝の気持ちしかない。どんなに技術の優れた医者でも心のケアは看護師にしかできない。だから、次は私が誰かの心に寄り添い、安心を届けられる存在になりたいと強く思った。その時の経験から看護師という仕事に尊敬の念を抱くようになった。

最近、ニュースやネットなどで「AIが人間の仕事を代わっていく」という話をよく見かける。医療の世界でもAIが病気を診断したり、手術をサポートしたりする技術が発展しているようだ。そう聞くとつい「いつか看護師もAIに変わってしまうのか」と思ってしまう。確かにAIは人間よりもミスが少なく、正確だ。しかし、どれだけAIの技術が進んでも看護師という仕事は人間にしか担えないと思う。なぜなら、AIには感情がないからだ。そのため、患者一人一人の不安や痛みに気づき、表情や言葉の奥にある感情を読み取り、寄り添うことはできない。たとえ同じ言葉を発しても、人間の声のトーン、眼差し、振る舞いから伝わるあたたかさや安心感は決して再現できないだろう。仕事を正確にこなせたとしても人と心を通わせることは不可能だ。看護師は医療技術以上に、痛み、不安を抱える人に寄り添う力、思いやり、共感する力など人間としての力が必要だと思う。実際に看護師の笑顔や言葉は私にとって安心感や勇気を与えてくれ、心の支えになった。

看護師は患者の心のケアをすることが主な仕事だ。医師のように患者の病気を治すことはできない。しかし、繊細な患者の精神的な部分を支えることができる。看護師は医師よりも長い時間患者と過ごしているため最も近い存在だ。あたたかい言葉や優しい気配りは患者の支えになる。患者の方の不安や痛みに寄り添い安心感を与えられるのは看護師ならではの力だと思う。単に医療技術があるだけでは到底なれない。命に関わる場面も多くある中で冷静な判断力や精神的な強さ、体力、コミュニケーション能力も求められる。

もちろん、看護師になるためには努力が必要だ。医療の知識を学ぶことは簡単ではなく、また様々な能力が求められる。そのため、今のうちから勉学に励み、将来の自分が選択肢を持てるようにしたい。

AIが発展し、医療の形が変わっていく時代であっても「人の心に寄り添う力」は人間にしか担えない看護師の本質だ。AIの力を上手に活用しながら、一人一人の患者さんと向き合い、かつての私のように不安を感じている患者さんに安心を届けられるような看護師になりたい。

心を繋ぐ

江戸川区立小松川第二中学校 三年

末吉明莉

「コミュニケーションの取り方は一つだけではない。」

この言葉を初めて聞いたとき、深く意味を理解することができなかつた。相手と言葉を交わして気持ちや伝え合う、このことだけがコミュニケーションをとることを指すと考えていたからだ。

この言葉の意味を知ったのは去年、職場体験が行われたときのことだ。職場体験では、以前から興味があった仕事への理解をより深めるため公共機関での体験を希望した。私が四日間体験をした場所は、障がい者の生活介護を行う施設だった。今まで、障がいがある人と関わるといった経験がなかった。

ため、自分にできるのかという強い不安を抱いていた。

そして、不安と緊張に包まれる中、四日間の職場体験が始まった。初日、ある大きな壁にぶつかってしまった。それは、初めての経験での緊張や、どのように関わるべきかが分からなかったことから、自分から動くことや話しかけることができなかつたことだ。このまま何もできず四日間が終わってしまうのではないかと焦りを感じていた。

そのため、職員の方にどのようにすればいいのかを教わった。すると、いくつかのアドバイスをいただくことができ、考え方を改められるようになった。そのアドバイスの中で特に印象に残ったものがある。

一つめは、利用者の方と視線を合わせて話をする事だ。利用者の方の多くは車椅子を使っていたので、立ったまま話しかけてしまうと上から視線で、相手も話しづらくなってしまうそう。そのため、アドバイス通り自分も座って視線を合わせて挨拶をしたり、話せるように工夫をした。すると、それに利用者の方にも笑顔で返してもらうことができ、嬉しさで胸がいっぱいになった。一つ一つの行動を工夫すること、心を開いてくれるきっかけになると感じた。

二つめは、常に向き合い寄り添うことが大切だということだ。利用者がなかなかうまく物事を伝えられなくても、急かさずにゆっくり話を聞いて、耳を傾けることを意識した。すると、色々な思いや考え、気持ちを聞くことができ、伝えたいことを届け合うことができ、思いが通う瞬間を感じられた。そして、三つめはコミュニケーションのとる方法についてだ。「コミュニケーションの取り方は一つではない。」これ

は、職場体験を通して最も心に響いた言葉だ。この施設では耳が不自由な方や話すことが難しい方も多くいた。どのように会話ややり取りをすればいいのだろうか、そう思っていたとき、こう教えてくださった。「身振り手振りや視線や表情でも相手に思いを伝えられる。」ということ。これを聞いたとき、大きく心が動いた。そしてすぐに行動に移した。例えば、利用者と好きなキャラクターや食べ物について絵やカードを使って伝え合ったり、園芸や創作の活動をジェスチャーを交えながら教え合ったりした。言葉を使わなくても相手に思いが届くことに気付かされ、気持ちを通じ合ったことに感動し、心が温かくなった。

職場体験の四日間で、見つけたものや新しく得たものは数えきれないくらいある。小さな工夫を積み重ねていくことや、相手を思いやることの大切さ。そして、「言葉を交えた会話」だけではなく、「心と心が繋がっていくこと」こそが本当のコミュニケーションをとる、ということ。そうすれば必ず思いがまっすぐ届くはずだということ。

職場体験での学びや経験は、これから色々な場面に活かさるだろう。職員の方から教わったことや、思いやりをもち続ける素敵な姿を見て忘れられない経験になったから。

その人にしかない良さは何なのか、どんな考えをもっているのか。心と心が通じればきっと分かり合え、伝え合える。それを忘れずこれから生きていきたい。

みんなが輝ける社会へ

国分寺市立第四中学校 三年

望 月 こころ

私は去年、職場体験とある塗装会社を訪ねた。初め、塗装の仕事は力が必要でどちらかというと男性が多く働いているイメージをもっていった。しかし、最終日には全く反対のイメージをもった。女性でも男性でも働ける素敵な仕事だと思う。

まず、一口に塗装業と言っても、現場を管理する人や職人さんなどたくさんの方が関わり一つの建物が出来ていることが分かった。自分には塗装のセンスがないと思う人でも、現場の進捗状況や他の会社とのコミュニケーションなどの面から塗装に関わることもできる。一見すると地味な仕事だが、その人たちがいないと職人さんたちが力を発揮できないのも事実だろう。

職人さんのすごさを感じたのは、実際に作業を体験したときだ。初めに青、赤、黄、黒、白、の五色から見本の色を作る、調色という作業をした。ただ色を作るだけなら絵の具と一緒に、あまり難しくはないと思うが、塗装するときの量を考えず作らないといけない。多く作りすぎたら余ってしまうし、少なすぎたら色を塗るときに困るだろう。三時間ぐらいかけてもうまく作れなかったので上手に塗れるコツを聞いてみた。

職人さんは

「少しずつ色を混ぜていくのがコツ」

とアドバイスをくれた。その通りにやってみると面白いほどにお手本とそっくりな色を作れた。職人さんは上手だねと褒めてくれた。私はそこで初めて塗装業のやりがいを感じた。

次に、作った色を木の箱に塗ったのだが、それも大変だった。広いところはローラーで塗り、溝は刷毛を使った。細部まで塗るときにきれいにできるよう、マスキングテープを使うなど工夫していることが分かった。また、壁に普通のローラーとは異なる砂骨ローラーというものを使い、模様をつける塗装も体験させてもらった。砂骨ローラーは重く、少しの壁に模様をつけるのもひと苦労だった。

職場体験は体験だけではなく、現場見学もさせてもらった。いくつか現場に同行させてもらった。どの現場にも休憩するところやトイレがあった。これも職人さんたちが働きやすくするための工夫なのだろうか。あたりを見渡してみると、女性があった。私は少し驚き、話を聞いてみた。その人は、小さいころから建築に携わる仕事をしたいと思っており、その夢を見事に叶えたのだった。

この職場体験を通して、塗装業は男女関係なく活躍できる場所だと知った。職場体験先の会社の方も昔と比べて、女性が増え、働きやすくなっていると仰っていた。塗装業は女性ならではのセンスが活かせる場でもあると仰っていた。私も体験してみて、調色の作業は難しいと感じたけれど、それと同時に楽しいと感じた。フェンスや家の外装など町全体を彩ることが出来る唯一の職業だと思う。

今、社会では性別にとらわれないような視点をもとうとい

う考えが広まりつつあるが、知らないうちに性別にとらわれた考えをしていないだろうか。私はこの職場体験を通して、心の奥にあった、男性だから、女性だからという考えが、どれほど無意識に自分の視野を狭めていたか気づかされた。現場で出会った女性の職人さんは、繊細に仕事をこなしていた。夢を叶えて働いている彼女の話聞いて、私もこうなりたいという思いが芽生えた。性別に関係なく、自分の好きや、やってみたいという気持ちを大切にしたいのだと、心から思えた。

塗装業は、色で空間をいっぱいにして、人々の暮らしに彩りを届ける仕事だ。そのひとつひとつの作業に、職人さんたちの思いや工夫が込められている。私も調色の作業を通して、自分の手で生み出す楽しさを知った。

この体験は、将来どんな道を選ぶとしても、役に立つであろう。性別にとらわれず、夢に向かって進む人たちの姿を、私も追いかけていきたい。

社会を変えたい

大泉高等学校附属中学校 三年

内山 紗 桜

私はなぜ勉強しているのだろうか、時折自分でも考えることがあります。今、自分のやりたいことも見つからず、何を目指しているのかも分からない、そんな状態で途方に暮れる

ことがよくあります。学校では「将来の進路について考え始めましょう」と何度も言われますが、ゴールさえ見つけられない私にとっては、その言葉が重く感じられるだけです。やりたいことがないわけではありません。人と関わることや、動物と触れ合うこと、バレエを踊ること、好きなことはたくさんあります。しかし、これらを仕事にするととなると、どうしても重く感じてしまい、自分にはその資格がないのではないかと不安が生まれます。その結果、周りに自分の気持ちを伝える勇氣ももてずにいます。

小学校のころから、ずっと将来の夢をもっていませんでした。保育園の頃にケーキ屋さんかアイドルになりたいと言ったのが最後で、それ以降は特に「これがやりたい」と思う職業も見つからず、気づけば九年が経っていました。時々、やりたいことを思いついても、「自分には無理だ」と諦めてしまい、結局踏み出すことができませんでした。やりたいことがあるのに、その一歩を踏み出す勇氣がどうしても出ないのです。

そんな私に、将来の夢を考えるべき場が突然訪れました。ある面接で「将来の夢は何ですか？」と聞かれる可能性が高いと知り、急に「何か職業を考えなければ」と焦り始めました。その時、真っ先に浮かんだのは「今の社会を変えたい」という思いでした。特に私は子育て支援や社会の法制度に強い興味をもっており、その分野で社会を変えていきたいと思うようになりました。自分がどんな社会を作りたいのかを考え、どんな職業を選ぶべきかを見つめ直すことができました。そして、私は来年から約一年間海外に行くことになりました。

た。そこで日本と海外の違いを学び、帰国後には自分の目指す分野で働くことができたなら、と考えています。そうした経験が私の人生にとって大きな意味をもつことを心から信じています。これからは、海外で学んだことを生かし、社会をより良くするための仕事に就くために、自分にできることを一つ一つ積み重ねていこうと思います。

そして、この目標に向けて、私は一つのこと気づきました。それは、自分が目標をもったからこそ、これからの毎日が有意義になり、何事にも意味が出てくるということ。目標に向かって努力する過程が、私にとって何よりも大切な時間になると思います。そのために、行きたい大学を調べ、必要な知識を得るための勉強をしっかりと続けていくつもりです。今まで勉強が苦手だと感じていた自分にとっても、この目標を達成するには、学校の勉強が大切だと改めて感じることができました。

これから私は、自分が進むべき道に向けて努力を続けていきたいと思っています。どんなに小さな一歩でも、前進し続けることで少しずつ自分の夢に近づいていけることを信じて。自分にとっての「社会を変える」という夢が、現実になるその日まで、私は諦めずに努力を続けるつもりです。



高等学校の部 最優秀賞

馬糞で拓く新たな魅力

東京都立農芸高等学校 三年

山田 弥彦

東京都立農芸高校には、都立高校で唯一、馬術部がある。ある日、私は馬術部の先生が「馬術部の馬から出る馬糞は全部焼却処分しているんだよね。」とお話しているのをお聞きした。先生に詳しく聞いてみると、一年間で排出される馬糞は約九千百kgにもなるという。

そこで、馬糞を焼却処分せず、有効活用できる方法はないか考えてみた。その時、「農業と環境」という授業で学んだ、家畜の糞を堆肥にして有効活用できるということをヒントに、馬糞を堆肥化するという事にチャレンジしてみることが決意した。ただ堆肥化しても利用できなければ意味がない。そこで、馬糞堆肥を調べてみると、土壌改良剤として用いることができること、馬糞堆肥がマッシュルーム用菌床として用いられることを知った。

馬糞堆肥を作らなければ何も始まらない。そう考えた私は、さっそく文献や、授業で学んだ知識をもとに混合する米ぬか、もみがらくん炭などの副資材を選定し堆肥化を行った。

しかし、製造した堆肥は文献に書いてある五十〜六十℃の堆肥熱が発生することはなく本当に堆肥になっているのか？

そもそも選んだ副資材は本当に正しいものなのか？方法はあったのか？など、疑問だらけになってしまった。

専門の方からの意見が欲しい。そこで私は、堆肥の製造、また今後実施するマッシュルーム栽培について研究を行っている大学・博物館などの研究機関を見学した。さらに、東京都三鷹市にて馬糞堆肥を製造、使用して農業を行っている農家にお話を伺った。植物残渣、生ごみを副資材として混合するという新たな視点や現状の改善点、攪拌のペースなど堆肥化のコツを沢山教えていただいた。農家さんに今行っている活動についてお話しすると、「それはもったいないね。その馬糞、俺が欲しいかも。」とおっしゃられた。このままでは研究材料がとられてしまう。悔しい、という思いが私のやる気に火をつけた。学校に帰ると、堆肥製造装置を改良、また作物の栽培の授業で発生するナスやキュウリなどの植物残渣を砕いたものを副資材として加え、堆肥化を行った。結果、堆肥熱は農家さんや文献の結果を超える六十五℃を記録。その後の観察で腐熟も十分進んでいることを確認できた。

次に私は、マッシュルーム栽培に取り掛かった。農家さんの助言を受ける前と受けた後に製造した馬糞堆肥、対象区として市販の馬糞堆肥を使ってマッシュルーム栽培を行った。改良前の馬糞堆肥ではマッシュルームの菌糸の伸長が悪く、失敗したが、市販の馬糞堆肥と改良後の馬糞堆肥では、菌糸が全体を覆い成功を収めた。この実験によって、製造した馬糞堆肥にはマッシュルームを育てられる能力があることが分かった。しかし、実験は本来のマッシュルーム栽培と比べ小規模かつ栽培環境が大きく異なっている。そのため、私はこ

れから、マッシュルーム栽培を行っている企業や農家さんを訪問して、マッシュルーム栽培についてさらに詳しく学んでいきたい。

私は、これまでの成果をTOKYOサイエンスフェアで発表した。発表を通じて、研究結果に対する新たな視点、今後の展望に対する助言、「面白い活動をしているね」、「頑張ってる」など激励をいただくことができた。

プロジェクトは始まったばかりで、マッシュルームの栽培など達成できていない目標が多々ある。そして、馬糞堆肥の製造量を増やす、マッシュルーム栽培の大規模化を行う、生産される馬糞堆肥やマッシュルームの活用など、私にはこの活動で挑戦したいことはたくさんある。この研究活動をさらに進め、馬の飼育で出た糞をゴミではなく、農業の力で資源として活用し、持続的な取り組みに繋げていきたい。

この活動から、環境に配慮した農業をやりたいという想いは高まり、卒業後は、大学に進学して、さらに研究を行いたいと考えている。



高等学校の部 優秀賞

私の今昔の物語

「学ぶことが生きがい」

東京都立橘高等学校 四年

染谷豊一

私は太平洋戦争が始まる前年、昭和十五年に現在の東京都江東区に生まれた。今年で八十五歳になる。そんな私の生きがいは「学ぶこと」だ。現在は定時制高校の四年生に在学している。卒業を控えて、これまでの人生を振り返り、私にとって「学ぶこと」はどのような意味をもつのかを考えてみたい。まず、題名とした「今昔の物語」については、国語の授業で学んだ「今昔物語集」から着想を得た。「今となつては昔のこと」だが、私にとつては八十年前のことも、「今」にながる大切な記憶だ。それは私がまだ四歳、昭和二十年三月十日から始まっている。

私が覚えているのは、空襲で家の周りが焼けたこと、避難した貯木場の水の中で丸太につかまった私を父が毛布で覆い、その毛布に水をかけ続けてくれたことだけだ。後に、その空襲で家族で住んでいた家は焼け、まだ二歳だった末の妹が死んでしまったことを知った。

小学校に入学したのは、昭和二十二年。家を失った私たちが家族は貧しく、満足に学校へ通えなかった。毎日飢えていた。

焼け跡で、空洞になった焼夷弾の破片や、砲弾を拾い集めて僅かなお金に換えたりもした。就職したが、漢字の読み書きも簡単な計算もできなかった。小学校や中学校で学べなかったことを恨みもしたし、後悔もした。

十八歳の頃、米俵を倉庫へ搬入する仕事を始めた。一俵六十キロの米俵をかつぐのは重労働だったが、日当四千五百円はありがたかった。しかし、仕事中の事故で腰を痛め、仕事を続けることができなくなってしまった。定時制高校の授業で労働基準法や労働災害について教えてもらい「あの時、労災申請ができていたら」と悔やんだものだ。

二十三歳で結婚し、長女と長男が生まれた。子の親になつて、空襲の時に毛布に水をかけ続けてくれた父の必死さと、幼い娘を家から連れ出せずに死なせてしまった両親の無念を実感した。自分の子どもには苦しい思いをさせたくない、毎日毎日、夜遅くまで懸命に働いた。読めない漢字や書けない漢字を辞書で調べることも覚えた。二人の子どもは無事に育ってくれ、生活にも余裕ができた。

そんな在る日、江東区報に夜間中学のことが載っていた。翌日には、墨田区役所に電話をかけていた。学術課の職員の方に、私の「学びたい」という思いを話した。数日後、文花中学校から電話があり、見学に行った。私のような者にも、中学校の勉強を基礎から教えてくれるという。その日は嬉しくて嬉しくて、帰宅するとすぐに妻や子どもたちに話をした。皆「応援するよ」と言ってくれ、私は七十七歳の中学一年生になった。

中学校では、国語、数学、理科、社会、英語など、初めて

学ぶことばかり。しかし先生方は、優しく根気強く教えてくれた。私の気持ちも変わってきた。仕事で難儀するたびに学校で学べなかった人生を恨んだり、悔やんだりしていたが、それは昔のこと。今の私は学ぶことがこの上なく楽しい。八十歳にして手に入れた私の「生きがい」である。

中学三年生になると、高校にも行きたいという気持ちが強まり、橘高校の定時制に入学した。普通科目のほかに「ものづくり」と「ビジネス」を学んでいる。とりわけ興味深いのは簿記の授業だ。商売の仕組みが理解でき、日々の買い物も楽しくなった。また、皮革工芸の実習では、小銭入れを作り、妻にプレゼントして、とても喜んでくれた。

これまでの私の人生は、戦争や貧しさなどの苦難もあったが、高校に入学してからは、平穏な中にも知ることに喜びと刺激に満ちた日々を送っている。先生方や家族のサポートのお陰だ。戦後八十年の今年、かつて日本人を殺した焼夷弾や砲弾を拾って生き延びてきた自分の姿が、ウクライナやガザの子どもたちと重なる。学ぶ楽しさを誰もが感じられる平和な時代が訪れることを願ってやまない。



将来の夢

愛国高等学校 一年

小久保 杏 栞

私の将来の夢は看護師になることです。今看護学生として学びを深める中で、知識や技術の習得の難しさを感じながらも、同時にやりがいの大きさを実感しています。私が看護師を目指したのは「母の存在」と「父の入院」がきっかけです。私は母が働く病院と併設された保育園に通っていたため、母を目にする機会は多かったのですが、家での様子とはひと味違いました。母は穏やかな笑顔と言葉で患者様やご家族に声を掛け、病院という不安や緊張が入り交じる雰囲気柔らかく変えている姿を多く目にしました。まるで魔法を使っているみたい、とその姿に憧れを抱き看護師という職業の尊さを教えてくれる印象をもったことを強く覚えています。その後訪問看護師へ転職した母。私は仕事姿を近くで見ることがより多くなりました。電話の対応では親身になって話を聞き、処置の方法を伝えたり必要であれば訪問したりと大変そうだなと思っていました。尋ねてみると「とても楽しいよ」と言っていて、格好良いなど再認識させられました。このような母の存在から保育園児の時からこれまで、看護師になりたいという夢が揺らいだことはありません。また父が入院していた際に接した看護師さん全員はとても親切でした。心配で不安そうな私たちに笑顔で挨拶して下さったり、励まして下さっ

たり、時には一緒に泣いて下さいました。涙を流すほど深く関わって下さっていたのかと驚いたほどです。患者のことを深く考え、ケアし寄り添って下さる、そんな看護師さんの存在に勇気付けられる周りの人もいると感じた経験でした。

現在私は看護学生として日々勉強をしています。学校の授業では、看護概論や人体についてなど専門的な用語を沢山勉強しますが、時にはその難しさに直面します。定期テストに向けてはただ名称を暗記するだけでなく身体のしくみを深く理解しなければ修得できないものもあり、なぜそうなるのかもよく考えて知識とすべきことがあることに気付きました。また疾病の成り立ちの授業では、清潔の保持が患者様の命を守ることに繋がるという責任の重さを学びました。看護師の行動一つひとつに意味があり、身の引き締まる思いがしました。さらに実技実習の授業では教科書だけでは学べないことを数多く経験しています。ベッドメイキングや清拭など基本的なことではありますが、患者役の友人の反応や素直な感想、そして先生の助言などから自分の課題を知ることができました。また自分が患者役になることで身をもって体験できたことでもあります。実習に向けての準備や片付けの際には、事前準備することの大切さや周りを見て行動することの大切さ、仲間と情報を正しく共有し協力することの大切さなど、看護は一人だけで行うだけではないことも知ることができました。これらの経験は、将来看護師として働く上でも欠かせない学びです。私はこの学びを通して深い知識や正しい技術はもちろんのこと、心に寄り添う姿勢が大切だと実感しました。今は未熟で失敗も多いですが、その度に改善点を見つけ、時

には仲間と支えながら乗り越えていこうと思います。

看護師という仕事は責任感も求められ、簡単に実現できるものではありません。壁にぶつかれることもあると思います。が、その先には人の命と心を支えるという大きなやりがいがあります。私はこの夢を決して諦めることなく実現のため小さな努力を続けていきたいです。そしていつか「あなたに看護してもらえて良かった」と言ってもらえる看護師になれるよう努力していきます。病気は患者様のみならず、周囲の人にも影響を与えます。父の容態に対しては涙を流すほど深く関わって下さったあの看護師さんの姿を見た時、私の決意は固まりました。だからこそ私も誰かを支えられる看護を提供したいと思うのです。夢に向かってこれからも頑張りたいと思います。

高等学校の部 佳作

様々な環境に触れて

東京都立園芸高等学校 二年

高久心暖

私は伊豆諸島の式根島という離島で生まれ育ちました。上京し寮で暮らしながら園芸高校に通い始めて、一年が経ちました。

園芸高校動物科では、二十種類以上の動物の飼育やトウモ

ロコシ、ダイコンなど様々な野菜の栽培を行います。収穫した野菜は生徒が持ち帰るのですが、量が多かったり形が悪かったりして残ってしまうことがあります。そのような野菜は飼育している動物に与えます。また、動物のフンを肥料にすることによって、動物のフンで肥料を作る、その肥料で作物を栽培する、未利用野菜を動物に与えるというサイクルができていくことを学びました。そして、私はそのようなサイクルは式根島でも行われていたことに気づきました。島では漁業が盛んです。漁師さんは、漁で網にかかった食用ではない海藻や鮮度が落ちてしまった魚などは畑に埋めて堆肥にします。そうすると土壌の栄養が増えて作物の育ちがよくなるのです。私の実家でも、食べ残しなどの生ゴミは畑に埋めて堆肥にしています。ここでも、未利用魚や家庭で出た食品ロスを堆肥にして、それを使って作物を育てるというサイクルがあったのです。

私は上京し、都会では生ゴミを堆肥にすることは珍しく、捨てるのが当たり前であることに驚きました。そして、農業に関わる機会が少ない都会でも、生ゴミを堆肥に活用し植物を育てるサイクルを行うにはどうすればよいのか考えることにしました。私が住む寮の敷地内には植物が植えられているスペースがあります。都内のアパートやマンションでも、公園や遊歩道など緑を感じられる場所がある施設が多いと感じます。都会には農地こそ少ないですが、リラックス効果や景観などのために設置される植物は多いのだと思います。そのような特徴を活かし、マンションなどに入居者共用のコンポストを設置し、できた堆肥を施設内の植物に与えるという

システムを導入するとよいのではないかと考えました。そして、定期的に敷地内の植物に肥料を与えるイベントを行い、入居者が自由に参加できるようにするのです。食品廃棄量の削減や植物の生育促進に加え、生ゴミを資源に変えて植物を育てるという体験を通して、環境問題への関心をもつきっかけになるのではないのでしょうか。

農業が身近な園芸高校や式根島では生ゴミを堆肥として活用していますが、農地が少なく植物を栽培することが少ない都会では、生ゴミを活用せずに捨ててしまうことが多いと私は気づきました。農業がすぐ近くにある生活と農業とはかけ離れた生活の両方を知ったからこそ、この問題に気づいたのだと思います。様々な環境を見て、それぞれのメリットやデメリットを色々な視点で考えることで、地域の問題を発見し、解決するきっかけになると学びました。そして、都市でも地方でも人々が暮らしやすく、自然と共生した社会を目指したいと考えました。この経験から、色々なことに挑戦し様々な環境に触れる大切さを実感しました。そのため、委員会活動で他校と交流したり、探究学習プログラムに積極的に参加したりして新しい環境に触れ、視野を広げるために日々努力しています。将来は社会の問題を発見し解決策を考えるだけでなく、人々の先頭に立ってそれを実行できる人間になりたいです。

喜び

東京都立園芸高等学校 二年

坂本 ひなた

私は現在、ブドウ園でアルバイトをしている。仕事内容は、ブドウの栽培管理を中心に、季節によってはトマトやナス、キュウリなどの野菜の手入れもする。はじめは道具の使い方が分からず、戸惑うことばかりだったが、少しずつ事に慣れていくうちに、働くことの喜びとは何かについて、自然と考えるようになった。

ある日、オーナーから一人ひとりに担当の木が割り当てられた。葉の状態や枝の伸び方、実の付き方など、日々の変化を観察し必要な手入れを自分で考えて行う。最初は自信がなかったが「この木は自分が育てるんだ」という責任感と愛着が少しずつ芽生えてきた。

ブドウの手入れは、細かな気配りが必要だ。特に摘粒の作業は、身の付き方や房の形を整えるために重要で、どの粒を残し、どの粒を落とすかで、収穫時の品質が大きく変わってくる。昨年は粒を多く抜きすぎてしまったため、今年は一粒一粒の間隔や形を丁寧にしながら、慎重に作業を進めた。しかし、摘粒は時間との勝負でもある。一房にかけられる時間は限られており、あまりゆっくり作業しては全体の作業が終わらなくなってしまう。それでも、丁寧さを欠くと房の形が悪くなったり、残した粒が混み合って病気になるや

なったりする。だからこそ、スピードと正確さの両方が求められる作業であり、集中力が必要だ。房の中心がふつくと仕上がるように調整するのは難しいが、その分、手をかけた実が立派に育っていく様子を見るのはとても嬉しい。

そして、夏の終わり、ついに収穫の時期がやってきた。私が世話をしてきたブドウも立派に実り、いよいよお客さんももぎ取りに来る日が始まった。自分が数か月かけて育ててきたブドウを、お客さんが自らの手でもぎ取り、「わあ、大きい」「きれいな形」と笑顔で話す姿を見ると、(自分の努力が実を結んだ)と心から思えた。私が見守ってきた木から生まれた実が、誰かの手に渡って喜ばれているそんな光景を目の当たりにしたとき、「働くことで得られる感動」を体の底から味わったような気がした。

勿論、ブドウ園の仕事は楽なものではない。炎天下での作業、泥だらけの長靴、虫刺され、冬の寒さでかじかむ手、つらいと思う日もある。でもそれ以上に、人の手で自然と向き合い、育てるといふ仕事には深い充実感がある。栽培を通じて「命が循環している」ことを感じ、自分の小さな働きが社会や誰かの喜びにつながっていると思うと「頑張ろう」という気持ち湧いてくる。また、職場の人たちとのつながりも働くことの喜びの一つだ。園の方々はとても温かく、時にはブドウの味見をしながら雑談したり、作業の合間に冗談を言い合ったりする。失敗して落ち込んだ時「大丈夫、みんな最初はそうだったよ」と声をかけてくれる言葉に何度救われたか分からない。働く現場には、教科書では学べない「人との信頼」があると思う。

私はこのブドウ園での経験を通して、「働く」ということは、誰かに命令されてやるのではなく、「誰かのために、自分の力を使って役立てること」なのだと思う。これから先、どんな仕事に就くとしても、この「働くことの喜び」と「やり遂げる力」を大切にしていきたい。

食品ロスを減らす未来の飲食店

東京都立農芸高等学校 二年

関根 縁

「このパン、美味しいね。」総合実習で私が製造した丸パンを食べた、母の一言。たくさんの人を幸せにする飲食店を経営することが夢である私は、この言葉が心に響きました。

中学生の時にテレビで見た家族経営の飲食店特集で「飲食店は人を笑顔にできる、すごい仕事だ!」と感じ、自分自身も飲食店を開きたいと決意を固めて、東京都立農芸高校食品科学科へ進学を決めました。

入学して学んだ、食品ロスの問題。農林水産省、令和五年度食品産業リサイクル状況等調査委託事業「食品関連事業者における食品廃棄物等の可食部・不可食部の量の把握等調査」によると、パン屋で廃棄されるパンのうち、実に約九十五・四%がまだ食べられる部分、つまり可食部だということです。愛情を込めて作られたパンたちは、食べられるにもかかわらず捨てられてしまっているのです。この事実にも

ショックを受けた私は、漠然と飲食店を開きたいと考えていた将来の夢が、「人と環境に優しい飲食店を開く」という具体的なものへと変化していきました。

そんな折、総合実習の授業で神奈川県にあるパン工場を見学する機会があり、私は企業の食品ロス対策に興味を抱きました。約五十種類のパンを大量生産しているこの会社では「食品ロスは大きな課題である」と代表が語り、「STOP! フードロスBOX」という取り組みを紹介してくださいました。「STOP! フードロスBOX」とは消費期限の近くなった様々なパンを三千円から三千五百円分詰め、そのボックスを自宅に届けるという配達サービスです。パンの種類は完全にランダムとなりますが、期限の近いパンを廃棄せずに食べてもらえるメリットがあります。配達日の選択ができないことや配達できる商品に限りがありますが、そのデメリットすらも、「どんなパンが届くのか楽しみ。」といった期待に変えるこの取り組みはとても素晴らしいと思いました。「従業員が頑張って作ったパンがそのままゴミ箱に行ってしまうのはもったいない。何とかしてロスにならないようにしたい。」と話す代表のパンに向き合う姿は、まさに私が目指す経営者そのものでした。

このようなお話を受けて、さらに他にロスを抑える対策があるのではないかと考え、杉並区にあるパン屋に取材を行いました。代表のお話によると、食品ロスの問題よりも材料の高騰や人手不足の二つが特に深刻な課題であることが明らかになりました。食品ロスについては、天候や時間帯に応じて出す量や種類を調整することで、ほぼゼロに抑えられていることが分かりました。また、どうしてもパンが売れ残る場合

は値引きを行い、売り切っていると云います。

こうしたお話を通して私は、食品ロスを減らす取り組みとしては受注販売が有効であると考えました。「STOP! フードロスBOX」のようなロスが発生してからの対策も極めて重要です。しかし、ロスを減らすという根本的解決にはなりません。そのため、注文を受けてから作ることがロスを減らすのに効果的であると考えます。ですが、取材をして分かったのは、食品ロスよりも深刻な課題があるということです。人手不足や特に材料の高騰は明確な対策が取りにくい点があり、解決が難しい課題です。この課題解決にはさらなる知識が必要になってきます。

そこで私は、高校卒業後、マーケティングや経済を学べる大学へ進学したいと考えています。そこでは、人手不足や材料の高騰だけでなく、経営全体の課題に向き合える力をつけ、さらに学びを深めていきます。また、今の私ができることとしては取材を続けていくことだと考えます。パン屋さんへの取材のように現場の声を聴いて初めて分かることもあります。知識を深めていく一歩として、今後も活動を続けていきます。

「人と環境に優しい飲食店」を開くためにこれからも学びを深め、一歩一歩前進します。



援農ボランティア紡ぐ地域と農業

東京都立農芸高等学校 二年

長瀬海音

私の高校生活は、通常の学校生活とは異なる、援農ボランティアの体験で彩られました。私はサラリーマン家庭の出身で、農芸高校に入学するまでは農業とは関わりがありませんでした。家の近くにも畑はありますが、誰がやっているのか、どこで売っているのか分からない。そのようなことから、農家はどこか離れた存在でした。

そんな私も、援農ボランティアで農業と関わるようになりました。きっかけは、近所の農家のインスタグラムを見ていた母が援農ボランティアという活動を見つけ、夏休みで暇だった私に「外に出てこい。」と勧めてきたからです。私はせっかくだからと応募し、必要な道具と好奇心だけ持って農家へ向かいました。

私が初めに訪れたのは練馬区にある農園です。ここではオクラの出荷調整を行いました。次に九月初旬、三鷹市で営んでいる農家に行きました。そこでは、ナスの収穫をしました。その後、休憩時間にお話を伺うことができました。その農家では、ボランティアなどの地域との関わりにより作業の手伝いで訪れる人は年間約千人もおり、野菜を買ってくれる人も増えたということを知りました。また、規格外野菜は流通させすぎると値崩れが起こるので加工して売るか堆肥にしてい

ると知りました。このような援農ボランティアに私は今まで五回参加しました。

今や農家は農産物を生産するだけでなく、加工や販売方法などの工夫も必要とされてきています。販売方法の工夫として独自の販路を持つ農家もいます。そのような中で、援農ボランティアは三鷹市の農家のようにボランティアさんが援農だけでなく消費もしてくれるといった、地域の人とコミュニティを形成して収益を上げる、コミュニティ経済をつくりだすことができます。これは農家独自の販路になるとともに、地域経済循環が引き起こされ、地域振興にもつながります。また、近年問題になっている規格外野菜をボランティアさんへのお礼として提供することもでき、これは、栽培した野菜のおいしさを知ってもらう機会ともなります。そして値崩れを起こさずに規格外野菜を減らすことができます。このように援農ボランティアは農家や地域にとつて、一石何鳥もの利益があります。しかし、援農ボランティアは都内でまだ一割未満の農家しか使っていません。これは技術指導が面倒、事故を起こされては困るからだとする農家は語ります。私はこの対策として、農家さんが直接相手をできないタイミングに初参加の人に対して作業方法を教えてきました。また、ポスターを作って学校に掲示したり、全校生徒の前で演説を行いました。後日「援農ボランティアに参加したよ。」と話をしてくれた同級生もいました。さらに、これからも援農ボランティアを続けて、普及活動を進めていきたいです。

私は援農ボランティアを通じて、農作業で体を動かして何

かを達成するといった楽しさ、地域の人と協力して物事を進めるといった面白さに気づかされました。もちろん、異常気象への対応など農業は楽しいだけではないでしょう。それでも農家が生産する農作物は必要不可欠なものであり、人手不足でも誰かがやらなくてはいけません。このようなことから私も農業、ひいては地域を支える一人になりたいと農家を目指すようになりました。高校卒業後は農業大学校へ進学し、更に作物に関する栽培技術を身に付けたいと考えています。

将来、農家になったときにはボランティア側だったことを生かして、道具を用意したり、マニュアルを作ったりして初心者に参加しやすい設備や制度を整えたいです。そして、ボランティアで培った知識、技術を、農業大学校での学びとともに、将来、農家として活用していくことを誓います。

服づくりに込める思い

東京都立農業高等学校 二年

石原 も あ

私が服飾科で学ぶ中で、最も強くものづくりの喜びを感じたのは、「ファッション造形」という授業でのワイシャツ製作である。普段何気なく着ているワイシャツだが、いざ自分で作るとなると想像以上に多くのパーツで成り立っていることを知り、圧倒された。製作では、最初に自分のサイズの型紙を製図することから始まり、一つ一つつくり上げるのにも

たくさんの知識や正確さが必要になることを知った。袖、えり、カフス、見返しなど、パーツごとに切り分けた布を見たとき、正直どれがどの部分になるのかさえわからず、不安な気持ちでいっぱいになった。

また、作業を進めていく中で、一つ一つ工程に細かい注意が必要だと知った。布と布をミシンで印通りに縫い合わせることは、思った以上に難しく、布がずれてしまったり直すこともあった。特にえりを縫い合わせる作業は、角をきれいに仕上げるのが難しいため、どうやったらきれいに合わせられるか、試行錯誤を重ねた。また、アイロンでしっかり形を整えないと全体の仕上がりに大きく影響することや、ボタンをつける位置がわずかにずれるだけでイメージが変わることを実感して、細部にこだわる大切さを学ぶことができた。

製作の中で苦労すればするほど、少しずつ形ができあがっていく過程に喜びを感じた。バラバラだった布が袖やえりとなり、全体が「服」の形になってゆく瞬間は本当に感動し、最後にボタンをつけ終えたときの達成感言葉では言い表せないほど大きかった。

そして、自分の手で作ったワイシャツを初めて着たとき、ものづくりの楽しさを実感すると同時に自分の成長を感じることができた。

ワイシャツの製作を通して気づいたのは、普段何気なく着ている服の裏側には、数えきれないほどの工夫が隠されているということだ。一枚の服を完成させるのには時間も手間もかかるが、その分できあがったときの喜びは大きい。私はそれを実感できたことが一番の収穫だった。

現在は、浴衣やワンピースの製作にも取り組んでいる。浴衣作りでは、布にヘラで正確に印をつけることが大変だ。印がずれると全体のバランスに影響するため、集中力と丁寧さが求められる。一方で、ワンピースでは自分の描いたデザインをもとに作業を進めていて、完成を想像しながら作れることに充実感を感じている。自分の理想の形をつくれるのも、ワイシャツ作りで学んだ基礎があるからだと思う。

こうした経験を通して私は、ものづくりには苦勞と喜びの両方があることを学んだ。大変な工程を乗り越えたからこそ完成したときの喜びがあり、それが次の挑戦につながっていく。服を作る過程は決して簡単ではないが、一つ一つに達成感があり、自分の成長を実感できる。

私は将来、服飾の道に進み、自分の手で作った服を誰かに着てもらえるようになりたい。着た人の生活を彩り、少しでも笑顔にできる服を届けることができたならば、幸せだ。服はただ身にまとうものではなく、人の気持ちを前向きにしたり、自信を与えたりする力があると私は信じている。

農業高校と出会って

東京都立農業高等学校 二年

一之瀬 結衣

中学校に入ったばかりの頃は、私がこの東京都立農業高等学校に入学するなんて全く想像もしていませんでした。そも

そも、農業高校という高校があることさえ知らなかったのです。そんなごく普通の中学生だった私は、特にやりたい仕事も、興味のあることもこれといってありませんでした。あつという間に中学二年後半になり、そろそろ本格的に進路を決めなければならなくなった時に、母が管理栄養士という仕事があることを教えてくれました。管理栄養士とは国家資格であり、病気の人や高齢者を含むあらゆる人々の健康状態やライフステージに合わせて専門的な栄養指導・管理を行う仕事です。病院や学校、福祉施設、企業などで、献立作成や給食管理、栄養指導などを中心に、社会ではたくさん管理栄養士が活躍しています。私の出身の小中学校は給食が美味しいと地元で有名で、毎日とてもハイクオリティな美味しい給食を食べて、元気に育ってきました。大好きな給食を毎日楽しみに、学校に登校していた子は多いのではないかと思います。今まで私がそうしてもらったように、美味しく栄養のある献立を作って子供たちに笑顔になつてもらいたい、そう感じた私は、第一歩として、現在の都立農業高校食品科学科に進学しました。

入学したての頃は初めて見聞きする道具や用語ばかりで、慣れないレポートに追われながらも、専門的な知識が身についていくのが楽しかった事を覚えています。農業高校の大きな特徴は、農業科の生徒は一年時に畑で実際に作物を育てることです。専門的な知識を持った先生方が一から教えてください、まずは農業の基本を学びます。夏ごろには自分たちで育てたキュウリやトマトを収穫し、家に持って帰ることができます。入学した時は、ここまで本格的な作業をするとは思っ

ていませんでした。放課後の畑観察や病害虫との闘い、中でも猛暑の中での農作業は、農業を初めて体験する私にとっては、簡単なことではありませんでした。しかし、実際に自らの手で種から野菜を育てたことで、今まで当たり前のように食べてきた作物のありがたみと、栽培することの苦労を肌で感じるようになりました。また、家族に採ってきた野菜を美味しいと言ってもらえた時は心から嬉しいと思いました。

他にも、食品科学科では、実習や座学を通じて食品製造や衛生管理などの専門的な知識を学んでいます。その日々の学びを実感できたのは、今年の夏休みに参加した職場体験で、お菓子工場にお世話になった時でした。体験先の座学で食品衛生の講義があったのですが、農業高校で習った内容がたくさんでてきました。基礎知識を持つていたことで、専門的な講義もよく理解できました。また、私たちが高校で学んでいることは、社会に出てからも役に立つのだ、ということを知ることができ、嬉しくなりました。この経験から、日々の授業において、根気強く解りやすいように教えて下さっている先生方に感謝の気持ちでいっぱいになりました。職業体験後、私は食品についてほとんど何も知らなかった中学生だった自分から、着実に成長できているということに気づくことができました。さらに、食品現場で実際に働く方々の真剣な姿勢や熱意を感じたことで、自分が将来どこかで働いている姿をイメージすることもできました。とてもたくさんの方のことを学ばせて頂き、貴重な体験でした。

今、私はまた進路について悩んでいます。管理栄養士とは別に、自分に合う職業があるのではないかと考えるようになって

り、一から自分を見つめ直している最中です。しかし、将来どんな仕事に就いたとしても、今学んでいる「食」は生きる上で絶対に必要な知識であり、きつと未来の自分の役に立つてくれると、強く思います。そのためにも、農業高校の生徒として残りの約一年半を大切に、精一杯学んでいきたいと思っています。

三宅島に生まれて

東京都立三宅高等学校 二年

沖 山 海 璃

私は三宅島で生まれ育った。周囲を海に囲まれたこの島は、東京都にありながらも都会とはまったく異なる、静かで穏やかな時間が流れている。朝は波の音で目を覚まし、夜には満天の星空を見上げる。自然とともにあるこの島の暮らしを、私は誇りに思っている。

三宅島の暮らしを支えてきたのは、漁業と農業である。島に住んでいると、漁師さんたちの働く姿をよく目にする。また、知人の漁師さんから魚をいただくことも多く、食卓には新鮮な魚が並ぶ。漁師さんたちが夜遅くから港に出て、たくさん魚をとってくる姿は心強い。水揚げされた魚はすぐに商店に並び、島の産物の流れをつくっている。カンパチやアカイカ、ムロアジなど種類は豊富だが、特に「キメジ」は三宅島の日常に溶け込んでいる魚である。キメジとは標準和名

で「キハダマグロ」の幼魚（十五kg以下）のことを指す。夕方になると、島内の商店には必ずといっていいほどキメジが並ぶ。三宅島のキメジは冷凍されずに提供されるため、赤身はさっぱりしながらも、もちもちとした食感が魅力だ。インターンシップで本土に行ったときに食べた寿司には、少し臭みや食感に物足りなさを感じた。そこで、改めて「島でとれる魚こそが本当の味」だと実感した。

一方、農業では「明日葉」や「島トウガラシ」など三宅島ならではの作物が栽培されている。さらに「マンゴー」や「パッションフルーツ」など南国の果物も育ち、島の特色を広げている。私の家は農家ではないが、「明日葉」を買ったことがないほど、近所からよくおすそ分けをいただく。最近では島の先輩たちがパッションフルーツを使ったお菓子を開発し、「島の農産物をもっと外に発信しよう」という動きが活発になっている。

私は現在、三宅高校の農業科で農業を学んでいる。クラスは私一人で、最初は不安だった。初めて会う先生と一対一で授業を受けることや、相談できる仲間がないことに戸惑った。しかし実際には、授業の一つ一つが新鮮で楽しく、面白い先生方がたくさんいる。そのおかげで一人での授業が苦ではない。むしろ楽しくてもっといろいろなことに挑戦してみたい。実習では、一人で作業をこなすため大変さもあるが、その分、機械や道具を扱う時間が多く、技術向上に恵まれた環境だと感じている。

将来、私は島を離れて進学する予定だ。高校の食品製造の実習で、自ら作った加工品を販売した経験を通して食品に関

心をもち、調理の専門学校へ進みたいと考えている。そして修行を積んだ後は、三宅島に戻って飲食店を開くことが夢だ。島でとれた食材を使い、訪れた人に「島の味」を伝えたい。島で生まれ育ち、島で学んだからこそ気づける魅力を外の人に広める役目を果たしたいと思っている。

車のナンバーは「品川」。東京に住んでいると言うと、都会を想像されることが多い。だが三宅島には電車もコンビニもない。それでも私は、この島に生まれたことを何より誇りに思う。この島には、豊かな自然、やさしい人たち、そして守るべき暮らしがある。この「魅力あふれる島」を守り続けたい。誰かに言われたからではなく、自分自身の意思でそう思っている。この島の未来をつくるのは自分たち若い世代だ。

道

東京都立八丈高等学校 一年

佐藤 瑠海

将来の進路について考えるとき、私の心の中にはさまざまなおもしろい交錯があります。明確な答えがあるわけではなく、むしろ迷いや不安の方が大きいかもかもしれません。しかし、その迷いの中にも、私なりの希望や目標が少しずつ見えてきています。正直に言うと、将来は何をするか決めていません。同級生の中には、医師になりたい、美容系の道に進むと明確な目標をもっている人もいます。そんな友達を見てみると、時と

して焦りを感じることもあります。しかし、決まっていなくても、さまざまな可能性に目を向けることができるのではないかと、最近は前向きに捉えるようになりました。

現時点では、大学進学を考えています。この道に惹かれた理由として姉の存在が強く影響しています。姉は現在、大学院生として充実した日々を送っています。姉が語る大学や大学院生のお話は、私の将来を思い描かせるものばかりでした。専門分野の知識を深めることの楽しさ、多様な価値観をもつ仲間との出会い、自分自身と向き合う時間の大切さなど、私にとっては新しい世界への扉のようです。姉は私に「大学は自分を見つける場所でもある」と教えてくれました。これは、将来の方向性が定まっていなくても、とても心強いものでした。大学で学ぶ四年間は自分が本当は何をしたのかを見つめる貴重な時間になると思います。私が一番興味をもっているのは食の道です。私の家は家族で民宿を経営しています。姉も食の道に進んでおり、身近な人たちの背中を見てきた私は食の道に興味を湧いてきました。学校の課題の職業インタビューを通して、更に親の現在の仕事に惹かれました。

一方で、まだ知らない世界にも興味があります。大学では様々な学問分野で自分の才能を発見する可能性もあります。趣味を通じて新しい道を探することも考えています。読書や音楽、スポーツなど、今まで楽しんできたことが、将来の職業につながるかもしれません。

私の地元は八丈島という伊豆七島の一つです。美しい自然に囲まれ、温かい人々に育てられたこの島は、私にとってか

けがえのない故郷です。一度本土で学んで八丈島で学びを過ごし、地元で貢献したいという気持ちもあります。島には人口減少や高齢化、産業の活性化など多くの課題があります。しかし、だからこそ自分が学んだ知識や経験を活かして、故郷の発展に貢献できればと思います。観光業の振興や地域の食材を活かした事業など、様々な形で貢献する方法があると思います。必ず島に戻らなければならぬとは思ってはいません。本土や海外で経験を積みより広い視野をもってから故郷に貢献するという選択肢もあります。大切なのは、どこにいても故郷を思う気持ちを忘れずに自分なりの方法で社会に貢献することだと思います。

私が最も大切にしたいのは、最後に「楽しかった」と思える人生を送ることです。成功や失敗はあるかもしれませんが、自分らしく精一杯生きることができれば、それで十分だと思います。迷いながらも前に進み、様々な経験を積み重ねながら、自分だけの道を見つけていきたいです。そして最終的に、自分が選んだ道を誇りに思えるような人生を送りたいと思います。

電気に対する意識

東京都立蔵前工科高等学校 一年

谷 中 宗 司

私は、中学生の頃から、身の回りの電気製品や機械に強い関心があり、「どうやってこの機械は動いているのだろうか?」

「電気が止まったらどうなるのだろうか？」といった疑問をよく抱いていました。そんな興味から、ものづくりや電気の仕組みを本格的に学びたいと思うようになり、工科高校への進学を決意しました。入学してからの授業や実習を通じて、私は電気の面白さや奥深さを実感し、将来はこの分野で社会に貢献できる仕事に就きたいと強く思うようになりました。

私の将来の夢は、電気工事士になり、人々の生活や社会インフラを支える技術者になることです。初めて東日本大震災のニュースをテレビで見た時に「何もできない自分の無力さ」を感じました。現地に行くボランティアの人たちや、専門職の方々の姿を見るたびに、「自分にも何か手伝えることがあるのではないか」と思っていました。停電の際、懐中電灯の明かりだけを頼りに過ごしていたという話を聞きました。電気がないというだけで、これほどまでに日常が不便になり、命に関わる事態にすらなるのだという事実には、改めて電気という存在の大きさを実感しました。

テクノロジーやエネルギーの分野は、日々進化しています。近年では、再生可能エネルギーや省エネ技術、IOTを活用したスマートホームなど、次々と新しい技術が登場しています。私たち電気技術者は、こうした進化に柔軟に対応し、常に新しい知識や技術を取り入れていくことが求められます。私は、現状に満足せず、学び続ける姿勢を持ち続けることが大切だと思っています。

また、電気工事士の仕事は、ただ技術力があるだけでは務まりません。現場では、他の作業員や施工主とのコミュニケーションが必要ですし、安全管理や工程管理といった責任も伴

います。だからこそ私は、人との関わりやチームワークを大切にしていきたいと思えます。正しい知識を持ち、仲間たちと協力し、励まし合いながら、これからも邁進していきます。私には自分の興味や好きなことを活かせるというだけではなく、人々の暮らしや社会を支える「縁の下の力持ち」になりたいという思いがあります。どんなに時代が変わっても、電気は私たちの生活にとって必要不可欠な存在です。その電気を安全に、正確に、効率よく届ける仕事に関わることができれば、とても誇らしく思います。

私は、学校での実習や日々の授業、資格取得などの経験を一つひとつ大切にしながら、今の自分が思い描く電気工事士を目指したいと思えます。今はまだ、分からないことも多いですが、失敗を恐れず、様々なことに積極的な姿勢で挑戦していきます。また、先輩方や先生方からたくさん学ぶこと、復習を通して知識や技術の習得に励みながら、自分自身の可能性を広げていきます。そして将来、電気を通じて社会に貢献できる、立派な技術者になることを目指して、一歩一歩進んでいきます。

つくることの楽しさ

東京都立墨田工科高等学校 二年

澤 蒼 介

私は、昔から手を動かして何かをつくるのが好きだった。幼いころ、折り紙で鶴や花を折るたびに、「できた!」とい

う達成感で胸がいっぱいになった。その感覚は、年齢を重ねても変わらない。むしろ、知識や経験を得るほど、ものづくりの奥深さと面白さに気づかされるようになった。ものづくりには、不思議な魅力がある。最初はただの材料にすぎない紙や木、粘土、パーツなどが、自分の手を通じて一つの形になっていく過程。それはまるで、バラバラだったパズルのピースが次第に絵を描いていくような感覚だ。そして完成したとき、自分の中にあつた「想像」が、現実の「かたち」となつて目の前に現れる。この瞬間に、私は何度でも感動する。

中学生のとき、学校の技術の授業で木工工作をしたことがある。小さな本棚を設計し、自分で木を切り、釘を打ち、組み立てた。最初はまっすぐ切ることさえ難しく、何度もやり直した。でも時間をかけて丁寧に仕上げていくのが嬉しくてたまらなかつた。完成したときの達成感は、今でも心に残っている。たとえ完璧ではなかつたとしても、「自分の手でつくつた」という事実が何よりも誇らしかつた。

ものづくりは、単に「つくる」行為ではない。そこには、考えること、工夫すること、失敗すること、そして改善することのすべてが詰まっている。思い通りにいかないことも多い。何度もやり直し、うまくいかずに落ち込むこともある。でも、だからこそ、うまくいったときの喜びは大きい。努力が結果につながったとき、自分の中に少しでも自信が芽生える。

また、ものづくりは、人と人をつなげる力を持っている。家族や友人と一緒に何かをつくるとき、そこには自然と会話が生まれ、笑顔が生まれる。作品が完成すれば、それは一つ

の思い出として残る。そして、誰かのために心を込めて何かをつくったとき、その想いは必ず伝わる。手づくりのプレゼントが嬉しいのは、その背景に「つくってくれた時間」や「気持ち」が込められているからだと思う。今の時代、便利なものがすぐに手に入る世の中だからこそ、自分の手で何かを生み出す経験がより貴重になっている。時間も手間もかかるけれど、その過程で得られる学びや感動は、決してお金では買えない価値がある。私はこれからも、ものづくりの楽しさを大切にしていきたい。そして、どんなに忙しい日々の中でも、「つくることの喜び」を忘れずに生きていきたいと思う。

なぜなら、「つくる」という行為には、自分自身と向き合う時間があり、自分の成長を感じることができるからだ。小さなアイデアが大きな形となり、そこに心を込めることで世界に一つだけの「何か」が生まれる。その瞬間、自分の存在がほんの少し社会に役立っているような気がして、心が満たされるのだ。ものづくりの喜びとは、他人に認められること以上に、自分自身が「自分であること」を実感できる尊い体験なのだ。私は思っている。そしてこれからも、つくり続ける日々を大切にしたいと願っている。



夢は公認会計士

東京都立葛飾商業高等学校 三年

在原 杏美

私の将来の夢は、公認会計士になることです。公認会計士は企業の財務諸表を監査し、その正確性を保証することで社会の信頼を支える大切な役割を担っています。普段の生活ではあまり身近に感じにくい存在かもしれませんが、経済活動を円滑に進めるためには欠かせない専門職です。私はこの仕事に強い憧れを抱き、将来の目標として明確に意識するようになりました。そのきっかけとなったのは、高校一年生でのアルバイトでした。

パン屋での仕事は接客や商品補充など、日常的な作業が中心でした。しかし、閉店後には「レジ締め」と呼ばれる作業があり、一日の売上を計算し、帳簿と照合する役割を任されることになりました。最初はお金の数を合わせる単純な作業だと思っていました。実際にやってみると少しの計算ミスでも全体の数字が合わなくなり、最終的に責任を持って調整しなければなりません。私はそのとき初めて「数字を正しく扱うことの重み」を実感しました。そして売上金額がきれいに一致した瞬間、数字が持つ力と、その裏側でそれを支える人の重要性を強く感じました。

その経験から「会計」という世界に興味をもち、調べていくうちに公認会計士という職業に出会いました。公認会計士

は、私がアルバイトで感じた「数字を正しく扱うことの大切さ」を、より大きな舞台で実践している人たちです。企業の財務を客観的に評価し、社会の信頼を守るという姿に深く感銘を受けました。私も将来、数字を通して社会に貢献できる人間になりたいと強く思うようになったのです。

その夢を実現するために、私は大学進学を大切なステップだと考えています。特に会計や経営に関する知識を幅広く学べる経営学部への進学を希望しています。経営学部では、簿記や財務会計、管理会計などの基礎を学ぶだけでなく、経営戦略や企業の仕組みに関する知識も身につけることができそうです。公認会計士は単に数字を扱うだけでなく、企業の全体像を理解したうえで判断を下す必要があるため経営に関する幅広い知識が不可欠です。大学で学んだことを土台に、専門学校や資格予備校などでさらに深く学び、難関とされる公認会計士試験に挑戦したいと考えています。

もちろん、この道は決して簡単ではありません。合格までには膨大な勉強時間が必要であり、強い意志と忍耐力が求められます。しかし私は、自分の夢をかなえるためなら努力を惜しまない覚悟があります。アルバイト経験から得た「最後まで数字を合わせきる達成感」が私にとって強い原動力になっていくからです。小さなレジ締めの作業であっても、一つひとつを正確に積み重ねていけば、大きな信頼へとつながる。その喜びを知っているからこそ、困難な試験勉強にも前向きに挑戦できると思います。

さらに、公認会計士として働く自分を想像すると、そこには大きなやりがいがあると感じます。例えば企業の決算を監

査し、その結果が投資家や社会にとって安心材料となる場面、または経営に悩む会社を支援し数字の面から改善策を提案する場面、どちらも社会に必要とされ、人の役に立つ瞬間です。私はそのような場で信頼される存在になりたいと願っています。そして、会計士として活躍することで、私自身が社会に貢献している実感を得たいです。

最後に、私がこの夢を語るとき、必ず思い浮かべる光景があります。それはパン屋の閉店後、静かな店内でレジ締め、売上と帳簿がぴったりと一致した瞬間のことです。小さな成功体験かもしれません、その時に感じた喜びと誇りは、今でも私の心を強く支えています。あの時、芽生えた思いを大切にこれからも努力を続け公認会計士という大きな夢を実現させたいと思います。

私は、数字の正確さを追い求め社会に貢献できる立派な公認会計士になります。

数字から見える企業の実像

東京都立葛飾商業高等学校 三年

篠原暖乃

私の将来の夢は、数字を通して企業の現状や将来の可能性を読み解き、経営判断に役立つアドバイスをを行うことです。そして、企業を内側から支える人材になりたいと考えています。

高校二年生のときの簿記の授業で同業他社の有価証券報告書を使って二つの企業を比較し、分析結果の発表を行いました。私は、株式会社Aと株式会社Bを取り上げました。両社は同じエンターテインメント業界に属しているものの、収益の仕組みや事業の強みには大きな違いがありました。そこで私は「二つの企業の成長戦略の違い」を調べました。

株式会社Aはテーマパークの運営を中心に入園料やパーク内の物販や飲食の売上で利益を上げています。一方株式会社Bは、キャラクターを中心にライセンス契約や商品開発、イベント運営で収益を確保しています。

このように数字を比較することで、同じ業界でも企業ごとに収益構造や強みが全く異なることが浮かび上がりました。企業分析をしている最中、先生に「働くならどちらの企業で働きたいか」と質問をされた際、私は株式会社Aを選びました。その理由は、毎年安定した集客力と継続的な施設投資で成長が期待できると感じたからです。また、株式会社Bは創造性や柔軟性を重視し自分のアイデアを考える戦略であるため、私自身が向いていないことも説明しました。このように数字と事業内容を根拠に挙げ、説明することに楽しさを感じました。そして、この経験から数字を読み解くことで企業の戦略や考え方が見えるということに強く心を惹かれました。数字は単なる計算ではなく、企業の方針や未来を映すものだと実感し自分もこうした視点で企業を支えられる人材になりたいと思いました。

また、私は授業だけでなく、検定取得にも力を入れてきました。全商簿記一級に挑戦した際には、原価計算や会計の複

雑さに苦戦しましたが、繰り返し問題に向き合うことで徐々に理解が深まりました。友人と教え合いながら取り組む中で、説明することで自分の理解がより確かなものとなり、インプットとアウトプットを繰り返すことで知識が定着していききました。努力を重ねて合格したときには自分の努力が確かな力につながったという自信を得ることができました。さらに、F P 三級の検定も取得し、資産運用や保険、税制といった個人や社会に関わるお金の仕組みに触れました。会計と合わせて学ぶことで、お金に対する理解がより広がり、数字を多角的にとらえる力が養われたと感じています。こうした経験は、粘り強さや学び続ける姿勢を育ててくれると同時に、将来の学びの基盤にもなっていると思います。

大学では、これまで身につけた基礎をさらに発展させ、実践的な力を磨きたいと考えています。具体的には、財務会計論や原価計算論、管理会計論などより専門的で実践的な科目に取り組み、企業の数字を正しく読み解く力を身につけていきたいです。

将来は、単に数字に強いだけでなく、数字を通して企業の戦略や課題を分析し、経営に対して具体的なアドバイスを行いたいです。そして企業を内側から支え、経営者や社員にとって価値のある提案を行える存在になることが私の目標です。高校での簿記や検定の経験を土台に、これからも学びを重ね、企業が健全に成長し続けることを通じて、地域や社会の安定に貢献をしたいです。そのために今できることを最大限に取り組み、大学での学びや資格取得にも励みながら、着実に成長していきたいです。

夢は子どもと家族の笑顔を支えること

東京都立葛飾商業高等学校 三年

仲野優衣

私の将来の夢は、ベビー用品や子ども服など、子どもとその家族を支える企業で働くことです。私は兄弟がいなかったため、小さい子のお世話に強い憧れを抱いてきました。その気持ちは私の中で大きな夢となり、子どもと関わる仕事がしたいと強く思うようになりました。その夢を叶えるため、多くの家族が笑顔で過ごせるよう早く社会に出て貢献し、また就職の際に役立つ資格が沢山取得できると考え商業高校に入学しました。

子どもと関わる仕事には、保育士など直接子どもを預かる仕事もありますが、私はもっと広い形で子どもと家族を支えたいと考えています。そのため、ベビー用品や子ども服を取り扱う企業で働けば、商品を通して子どもたちの成長をサポートできるのではないかと思いました。生まれてすぐの赤ちゃんから、成長していく子どもたちが毎日使うものを安心、安全に届けることで、親御さんたちの負担を減らし、子育てが少しでも楽しく感じられるような空間を提供したいと思っています。

この夢を実現するために、私は三年生の選択授業で「保育基礎」を選びました。授業では子どもの発達や子どもとの関わり方、対応の仕方について学び、「保育技術検定」という

検定にも挑戦しました。この検定では、言語表現、家庭看護、造形表現、音楽リズム表現の四つの項目があり、私は三級を受験し無事に合格することができました。検定の勉強を通し、子どもの年齢や性格に合わせた接し方や、安全に過ごしてもらうための工夫、子どもが楽しく成長できる環境づくりの大切さを学びました。

また、夏休み期間中に保育園実習を行い三歳から五歳児クラスを担当しました。クラスに入った瞬間から「遊ぼう」と声をかけてくれたり、手を繋いでくれたりする子もいて、とても嬉しい気持ちになりました。しかし、実習では一人の子だけに関わるのではなく全員と平等に接することが大切で、そのバランスを取ることが難しいと感じました。それでも、一人ひとりと向き合い、安心して過ごせるよう心がけたことで、最後には「また来てね」と笑顔で言ってもらうことができました。この経験から、子どもたちの気持ちに寄り添いながら信頼関係を築き、一人ひとりの成長をそばで支えることの大切さを強く実感しました。安心できる存在がそばにいて、子どもたちは自分らしくのびのびと過ごすことができると学び、その環境づくりに貢献したいという思いがより一層高まりました。これからも相手の立場になり、子どもたちや親御さんたちが心から笑顔になれるような関わり方を大切にしていきたいと思います。

保育基礎の授業や保育園実習の経験を通して、私は「子どもや家族が安心して頼れる存在になりたい」という思いがますます強くなりました。ベビー用品や子ども服は、毎日使うものだからこそ、安心、安全であることはもちろん、親御さ

んが「買ってよかった」と思えるような商品をお届けしたいと考えています。そして、「このお店で買いたい」と思ってもらえるような信頼されるスタッフになりたいです。これからも、もっと知識を増やし、たくさんの人と関わりながら自分を成長させていきたいです。子どもと家族の笑顔を思い浮かべながら、一つずつできることを増やし夢に近づいていきたいです。将来、私に関わった商品やサービスをを通して「この商品があつて良かった」、「子どもが元気に成長できて嬉しい」と感じてもらえることが何よりも大きな喜びです。そのためにも常に努力を惜しまず、どんな時でも優しさと思いやりの心を忘れずに持ち続けたいです。どんなに小さいことでも、目の前の一人ひとりに丁寧に向き合い、笑顔や感謝の言葉をいただけるような人でありたいです。この夢を叶えるために、これからも前向きに挑戦を続け自分の可能性を広げていきます。

挑戦が私を強くする

東京都立葛飾商業高等学校 三年

森 田 有 紗

私はこれまでの高校生活を通じて、努力することの大切さを学んできました。特に商業科での学びは、私の進路を大きく左右した経験です。高校では全商簿記一級やFP二級など、数多くの資格取得に挑戦してきました。最初からすべてが順

調だったわけではなく、例えば簿記検定では一度不合格という悔しい経験をしました。しかしそこで諦めることなく、毎日放課後に補習へ参加し、遅くまで残って勉強を続けました。その努力の積み重ねによって、最終的に合格を勝ち取ることができました。この経験を通じて、私は「目標に向かって継続的に努力する力」こそが自分の強みだと自覚しました。

商業高校で最も成長に繋がった出来事は、夏休みに取り組んだFP三級の勉強です。周囲の人からは「三か月から一年はかかる」と言われていましたが、私は短期間で合格することを決意しました。朝の九時から午後四時まで毎日机に向かい、二週間集中学習を続けました。その結果、学科試験に合格することができました。その後はお盆休みに入り、学校での学習サポートが受けられない状況でしたが、自習を続けて実技試験にも挑戦しました。わずか三週間という期間での合格は、私にとって大きな自信になりました。この経験から、時間の使い方や計画の立て方次第で自分は想像以上の成果を出せると実感しました。これは資格取得以上に大きな学びであり、今後の人生においても強みになると考えています。

こうした学びをさらに深めるために、私は大学進学を目指しています。私が目指している大学では、商業系の知識や資格取得のためのサポートが充実しており、特に簿記や会計分野での教育が整っています。またゼミ活動を通じて、理論だけでなく実践的な学びも得られる環境があります。私はこの環境の中で、将来的に公認会計士や企業の経理職といった専門的な職業を目指したいと考えています。

私の夢は、専門的な知識と資格を生かし、企業や社会の発

展に貢献できる人材になることです。高校で学んだ簿記や会計の知識は、単に資格取得のためだけではなく、社会全体の仕組みを理解するためにも役立つと感じています。家計管理や社会の経済ニュースを意識するようになったのも、この学びのおかげです。例えば、米の価格高騰のニュースを見たときにも、単なる物価上昇という表面的な理解だけでなく、背景にある経済の仕組みや家庭への影響まで考えることができました。このように、学んだ知識を自分の生活や社会問題に結びつけて考えられるようになったのは大きな成長だと思っています。

進路を考える上では、資格取得や専門分野の学びだけでなく、自分自身をどう成長させたいかも重要だと思っています。私は努力を続けることは得意ですが、時には人見知りをしてしまう面もあります。だからこそ大学では、ゼミ活動やグループワークを通じて人との関わりを増やし、積極的に自分の意見を発信できるようにしたいです。また課外活動など学外での経験も大切にし、幅広い視野をもてるようにしたいと考えています。

私はこれまでの経験から、「努力は必ず自分を成長させる」ということを学びました。今後もその信念をもって大学での学びに取り組み、資格の取得や将来の夢に向かって進んでいきたいです。そして将来は専門的な知識を活かしながら社会に貢献し、人々から信頼される存在になりたいと考えています。

私の進路と将来の夢は、まだ道の途中にあります。しかし、これまでに積み重ねてきた努力と学び、そしてこれから挑戦

し続ける姿勢があれば、きつと目標にたどり着けると信じています。私は自分自身の可能性を信じ、これからも前を向いて一歩ずつ歩んでいきます。

私の夢

東京都立忍岡高等学校 三年

石井 唯

私の将来の夢は、ウエディングプランナーです。これは小学校の卒業作文で書いた一言です。ウエディングプランナーとは、結婚する人たちのために結婚式を計画して手伝う仕事です。人生で最も幸せな一日といわれる結婚式をお客様の希望に寄り添いながら一緒に上げる素敵な仕事です。きっかけは、祖母の働く姿でした。私の祖母は長年、着付けやヘアメイクの仕事をしており、結婚式や成人式の現場にも多く関わってきました。小さい頃から祖母の楽しそうに働く姿に憧れをもち職業調べをしていた時に見つけたのがウエディングプランナーだったのです。ですが、成長するにつれその夢は変化していきました。

私たちの中学校入学は特別なものでした。それはコロナの影響で分散登校から始まったからです。家にいる時間が多くなり私は手芸という趣味を見つけました。始めは母にたのまれたマスクづくりでした。ミシンの使い方を覚えティッシュケースやクッション、シユシユなど作れるものがだんだん増

えていきました。そして、部活動では家庭科クラブに入部しました。部活動を通して、ものづくりの楽しさ、製作の奥の深さを知り将来は洋服に関わる仕事がしたいなと思い被服製作の学べる忍岡高校への入学を決めました。高校生活は楽しいこともありましたがその分大変なことだらけでした。毎日のように布にさわったりミシンや手ぬいを練習しました。そして学んでいくうちに甚平やゆかた等の和服、シャツやパンツなどの洋服ではなくドレスに関わる仕事がしたいと強く思うようになりました。

高校では、体育祭や文化祭を通してイベントの企画や運営に関わる中で、人の意見を聞いたり相手の希望を引き出すことの大切さを学びました。体育祭では特に体育委員としてクラスをまとめました。各種目のメンバー決め、リレーの走順決めを考えなるべく一人一人の希望が叶うように沢山考えました。体育祭当日も呼びかけや休みの人の対応など最後まで自分のできることを全力で頑張りました。文化祭ではファッションショーに向けて衣装製作や会場づくりを頑張りました。一人一人が個人で衣装はつくりませんが、ファッションショーでは一つになりみんなで作ることの素晴らしさや感動を知ることができました。また、友達のメイクやヘアアレンジをし自分の技術で人を笑顔にできるといふことのうれしさと達成感を知ることができました。そして、人の美しさを引き出すような仕事がしたいと心から思いました。そして、進路について考えるようになりブライダルの専門学校に行っていた時に見つけたのがドレスコーディネーターという仕事です。ウエディングプランナーとドレスコーディネーターという仕

事は、一見異なる仕事に見えますがどちらも新郎新婦の想いに寄り添い人生で一番幸せな日を形にするという点では共通しています。私はウエディング全体の流れを理解しその人の個性や希望にぴったり合うドレスを提案できるドレスコーディネーターになりたいと考えています。そして、将来は衣装だけでなく小物やヘアメイク、会場の雰囲気とのバランスなど全体を見ながら提案できるようにドレスコーディネーターを目指します。そのためにも、まずはウエディングプランナーとしての知識や経験を積みその上でドレスという分野を専門にしていきたいです。

花嫁さんの笑顔を引き出せるドレスコーディネーターになるために私はこれからも学び続け努力を重ねていきます。そして、いつか自分の成長した姿を祖母に見せられるように信頼されるあたかいドレスコーディネーターを目指して頑張ります。

人と向き合う大切さ

東京都立忍岡高等学校 三年

井出 なな実

私は高校で保育を専門的に学んできました。最初は「子どもが好きだから」という単純な理由で選んだ保育の道でしたが、学び重ねるうちに、保育は子どもを育てるだけでなく、自分自身の人生観や人との向き合い方を深く考えるきっかけになる分野だと気づきました。

保育の授業では、子どもの発達段階、生活習慣、言葉の発達、心の成長など、さまざまな知識を学びました。その中でも特に心に残っているのは、「子どもは大人の関わり方で変わる」ということです。子どもは言葉や表情、スキンシップなど、日々の関わりを通して安心感や信頼を育てていきます。反対に、大人の無関心や否定的な言葉は、子どもの自己肯定感を大きく傷つけてしまうこともあります。

こうした学びを実感したのは、保育実習のときでした。私はある保育園で三日間の実習を経験しました。最初は子どもたちが心を開いてくれるか不安でしたが、毎日目を見て話しかけ、同じ目線で遊び、名前を呼びながら関わるうちに、少しずつ笑顔を見せてくれるようになりました。特に印象に残っているのは、普段はあまり話をしない子が、帰り際に「また明日も来てね」と言ってくれたことです。その一言が本当に嬉しくて、「関わり方次第で、心はちゃんとながらんだ」と実感しました。

子どもたちは、小さな体で一生懸命に自分の気持ちを伝えようとしています。まだ言葉がうまく使えない年齢の子どもでも、表情や行動でサインを出しています。私たち大人はそれをしっかりと受け止める力と、温かく包み込む姿勢が求められます。保育は、子どもからたくさんのお話を教わる仕事でもあると、私は感じるようになりました。

また、保育を学ぶ中で、命の重みや尊さについても深く考えるようになりました。子ども一人ひとりが持つ可能性は無限大です。その命が健やかに、安心して育つ環境をつくることは、社会全体の責任でもあります。そしてその第一歩を支

えるのが、保育士の役割です。私は、自分がその一端を担えるような人になりたいと心から思うようになりました。

保育の勉強を通して、私は「人と向き合う力」「寄り添う力」「受け止める力」を学びました。これらは、保育の現場だけでなく、これからの人生を生きていく上でも欠かせない力です。人と人との関係が希薄になりがちな現代だからこそ、こうした温かいまなざしを持った関わりが必要だと強く感じています。

将来、私は保育士として働きたいと考えています。ただ子どもを預かるのではなく、その子の人生の土台をつくる大切な時期に関われる責任とやりがいを胸に、一人ひとりの子どもに丁寧に向き合える保育士になりたいです。そして、子どもだけでなく保護者とも信頼関係を築き、地域の中で安心できる居場所を提供できる存在になりたいと思っています。

高校での保育の学びは、私にとって将来の夢の出発点であり、自分の人生を見つめ直す大切な時間でした。子どもたちの純粋なまなざしと、そこに込められた思いに触れることで、私は「誰かの力になりたい」「人に寄り添える人でありたい」と思えるようになりました。これからもこの思いを大切に、自分らしい歩みを続けていきたいです。



食を通して気づいた協力と

挑戦の大切さ

東京都立忍岡高等学校 三年

木下綾華

高校の専門家庭科目の授業は、私にとって将来の進路や生き方を考える大きなきっかけとなった。中でも調理実習は、料理の知識や技術の他に仲間と協力する姿勢や衛生、時間管理の重要性、そして「食べる人のことを思って作る」という調理への向き合い方を学ぶ貴重な経験だった。この授業を通して私は、将来は和食の料理人として働きたいという強い思いを抱くようになった。

授業では、和食・洋食・中華・製菓といった多様なジャンルの調理を体験した。それぞれの料理には独自の技法や考え方があり、どれも学びがいがあるものだった。たとえば和食では、だしの取り方や素材の持ち味を生かす調理法が中心であり、火加減や包丁の使い方ひとつにも繊細な注意が必要であった。洋食では、ソース作りや焼き加減の調整など、仕上がりに大きく関わる細やかなコントロール力が求められた。中国料理では、高温で一気に仕上げるスピード感と強火を使いこなす感覚が重要で、製菓では分量の正確さや手順の順守が味や見た目で直結するため、慎重な作業が必要であった。

こうしたさまざまな料理を実習で経験する中で、「料理は科学であり芸術でもある。」ということ強く実感した。少

しの火加減の違いや調味料を加える順番の違いが、味や食感、見た目に大きな変化をもたらすことに驚かされた。また、ただレシピ通りに作るのではなく、盛り付けのバランスや色合い、食感の組み合わせまで考慮することで、料理は「食べる人への思いやり」が表現できるものになるのだと気づいた。これらの授業を通して、私は「おいしい料理とは、味だけでなく見た目や香り、そして食べる人への気遣いを含めた総合的なものである」と深く理解することができた。

また、衛生管理や時間管理についても指導され、調理現場で求められる基本的な力を身につけることができた。調理中は常に清潔に保つ意識が求められ、まな板や包丁の使い分け、こまめな手洗い、食材の温度管理など、安全と衛生を守るための行動を徹底するようになった。作業スペースの整理整頓や、時間内にすべて終わらせるための段取りを考える力も、授業を重ねるごとに少しずつ身につけていった。これらの習慣は、今後調理の現場で働く際にも必ず役に立つと実感する。こうした学びや経験を重ねる中で、私は「将来は和食店で働きたい」という強い思いを持つようになった。和食は、日本の風土や四季、文化を料理で表現する繊細で奥深い世界である。素材を大切にしながらも、美しさと調和を追求するその姿勢に、私は強く惹かれていく。和食の世界では、包丁の使い方ひとつ、器の選び方、盛り付けの一皿にも意味が込められており、そのひとつを丁寧に学びたいと思っている。将来は、食べる人の気持ちに寄り添いながら、一品一皿を丁寧に仕上げるのできる料理人になりたい。そして、私の作った料理を通して、誰かの一日が少しでも豊かになった

り、温かい気持ちになったりするような、そんな仕事ができるようになりたいと思っている。

これらの授業での学びは、単に調理技術を身につけるだけでなく、料理に向き合う姿勢や他者の関わり方、文化などそして自分自身の将来を切り拓く力を育ててくれた。私はこの貴重な経験を胸にこれからも料理の道を一步ずつ、真剣に歩んで行きたい。

インターンシップで得た大切なもの

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

清原千姫

私はこの夏、ホテルのペストリーでのインターンシップに参加しました。期間は五日間と限られていたため、その分必死に取り組んだことで、進路選択に大きく繋がる経験となりました。緊張や不安もありマイナスな気持ちになることもありました。沢山の学びを得る喜びや楽しさが前向きな気持ちにさせてくれました。

このインターンシップで得たものは、大きく分けて二つあります。それは、実際の現場での作業を通じて学んだこと、「就職する」ことについて考えることができたことです。

そもそも私がペストリーを志望したのは、高校の授業で菓や製パンに触れた時に、やりがいを感じたからです。私は高校卒業後すぐに就職することを希望しているため、ペスト

リー特有の学びとともに、どの職場にも共通する大切なことは何かを意識してインターンシップに取り組みました。

まず、現場での作業についてです。ホテルでは徹底した衛生管理が行われています。キッチンに入ると、服を粘着ローラーできれいにし、手洗いと消毒をして手袋を着けてから作業が始まります。社員の方々が一つ一つのケーキに対して丁寧ながらも素早く取り組む姿を見てプロのすごさを改めて実感しました。また、実際にショートケーキ作りを担当し、果物の向きや見せ方の工夫など、多くを学ばせていただきました。初めて盛り付けを教わって実際にやってみた時、なかなか向きや角度を均一にできず悔しかったですが、同じスイーツの盛り付けを別日にやると、前回よりも上達しており、社員さんの修正なしで完成させることができました。その時の達成感は普段感じていたものより大きかったです。そこからは、一度上手いかななくても、あきらめずに行うことで上手にケーキを仕上げられました。

現場で特に印象的だったことは二つあります。一つめは「アレルギー対応」です。通常はフルーツカットに同じまな板を使うことが多いですが、アレルギーを持つお客様のご予約がある時は必ず別のまな板を使っていました。多くのスイーツを作る中で、お客様一人一人に気を配る姿を見て、私も将来、忙しくてもお客様と真摯に向き合えるように頑張りたいと思いました。

二つめは、「就職する」という意味についてです。インターンシップ中、重い物を持つたり難しい作業を任せられたりすると、その大変さに圧倒されることもありました。不安になっ

てしまう時もありましたが、一度成功した達成感や楽しさを思い出すと、また頑張ろうという気持ちになりました。忙しい中でも心配りを忘れず楽しそうな社員さんを見て、なぜいつでも楽しく仕事ができるのだろうと考えました。それは、自分の好きなこととやりがいと両立できる職場を選んでいるからだと感じました。そのため、私は学校の進路相談を通して、自分に合った職場を見つけ、働き始めてからも努力を絶やさず少しずつ頑張っていきたいと思いました。

以上二つの理由から、私はインターンシップを通して、未来を見据えるための大切な学びを得ることができました。今回のインターンシップでの経験を忘れず、この学びを生かして、学校生活や進路選択に生かしていきます。

将来の夢と特別な体験

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

倉地 勇 吾

私は、将来多くの人を自分の料理で笑顔にしたいと思っている。お客様の「特別な日を作ることができる料理人」それが私の夢だ。このような夢をもったきっかけは、ある町中華の店主さんだ。

小学生だった私は、食物アレルギーをもっていたことにより自分の食べてみたいと思ったものを満足に食することができなかつた。その時に出会ったのは父が昔よく通っていた町

中華だ。ただの町中華だと思うかもしれないが、ここでは特定原材料五品目を使用しておらずすべての料理を食べることができた。当時の私にとってはメニューを見て食べてみたいと思っただけで、特別で嬉しいことだった。そこで食べた料理は、今でもずっと忘れられない大好きな味だ。私は、そんな普通の日常を普通ではない「特別な日」にしてくれた店主のことがとても格好よく見えた。そこから私は、料理というものにとっても興味湧くようになり、いつかはあの町中華の店主のようなお客様の「特別な日」を作ることができるとなりたいと思うようになった。

私は、この夢を叶えるために調理師免許を取得することができる高校に入学した。普通の高校の勉強と調理実習は大変だが、様々なことについて知ることができるのはとても楽しくてやりがいがある。何より自分の技術が上がっていることを実感すると夢に少しずつ近づいているような気がしてとても嬉しくなった。

そんな生活を一年続け、二年生になりこの夏に高校生活で大切な行事の一つである五日間のインターンシップに行かせていただいた。初日私は、自分のミスで困るのは自分だけではなく、お客様やお店に関わっているすべての人であるということにプレッシャーを感じ、不安を抱きながら出社した。厨房に入り緊張しながら挨拶した私にお店の皆さんは、優しく声をかけてくださり、私の不安は少し和らぎ、その日様々なことを教えてもらいながら初日を終えることができた。私が驚いたのは、お店の皆さんが私に気をつかって

ださりながら、抜群の連携でオーダーがきたらすぐさま自分の仕事を理解し、次何をするのかを考え、とてつもない速度で料理を完成させていることだ。一人一人が仕事に真剣に取り組む、少しでも早くお客様に届けたいという思いがその仕事のスピードやモチベーションの維持に繋がっているのだと考えた。また、意外だったのは職場の雰囲気の良いことだ。今までは、調理の現場というのはシェフが絶対で、厨房ではあまり会話はなく、怖い場所なのだと考えていた。しかし、実際はシェフ自ら声をかけてくださることも多く、とても和やかな雰囲気厨房だった。もちろんミスがあれば注意し、集中しなければならぬ場面では最低限の会話で連携をとる必要がある、ただ良い雰囲気仲間が良いだけではない。意識の切り替えがしっかりしているからこそ雰囲気作りができるのだと思っただ。

このインターンシップで実際の業務を体験したことで自分の働いている姿を少しイメージすることができた。この経験を生かして夢である「特別な日」を作る料理人を目指して、努力を続けていく。



ゼロから始める料理の世界

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

古 関 龍 介

小さい頃、母が台所で料理をする姿をよく見ていた。味噌汁の湯気、炒め物の音、笑顔で手際よく料理を進める母。料理はただの「家事」だと思っていたけれど、今になって思えば、そこには愛情と誇りが込められていた。私はいつしか、そんな母の背中に憧れを抱くようになっていた。

中学校を卒業するとき、将来の進路を真剣に考えた。普通高校の高校に通い、そのままなんとなく大学に進学して社会に出ても、自分の強みを活かしかれる確信がなかった。私は野球などのチームスポーツをやってきたため、仲間を理解し、協力することに長けている。この強みを踏まえて葛藤をしていたとき、ふと頭に浮かんだのは「厨房の中でコミュニケーションを取りながら協同して作業をする料理人」だった。料理には人を笑顔にする力がある。家庭でも、レストランでも、病院でも、それほど変わらない。そんな「食の世界」の力に、自分も関わりたいと思ったのだ。

私は調理師免許を取得できる学校に進学し、ゼロから料理の技術を学び始めた。包丁の握り方、食材の切り方、火加減の見極め。最初は思うようにならないことばかりだった。特に実習では、味が決まらなかつたり、盛り付けが不格好だったりと悔しい思いもたくさんした。でも、先生や仲間から学

び、少しずつ自分なりの感覚が身についてくると、料理が少しずつ楽しくなった。

また、学校での勉強やアルバイト先の厨房を経験するなかで、私は「美味しさ」だけでなく「健康に配慮した食事」の大切さにも気付くようになった。例えば、高血圧の人には減塩、糖尿病の人には血糖値を考えたメニュー。そういった栄養の知識をもった料理人になれば、もっと多くの人の役に立てるのでないか。そう考えるようになった。

そこで今、私は調理師免許を取得したあとの次のステップとして、「管理栄養士」の資格の取得を目指している。管理栄養士は、食事による健康管理のプロフェッショナルだ。病院や介護施設、学校、企業など、活躍の場は広く、単に「栄養バランスが良い食事」を作るだけでなく一人ひとりの生活習慣や体質に合わせた「生きるための食事」を提案できる力が求められる。料理人としての技術と、管理栄養士としての知識。その両方を兼ね備えた存在になれば、単に美味しいだけでなく、人の体と心に優しい料理を届けられるはず。私は、そんな「思いやりのある食」を提供できる人になることが夢である。

しかし、夢はまだ遠い。ただ、ゼロから始めたこの道を、少しずつでも自分の足で進んでいることに、私は小さな誇りを感じている。失敗もたくさんする。包丁で指を切ってしまった日、味が思うように決まらなかつた日、先生や先輩に厳しい言葉をもらって落ち込んだ日もあった。でも、その一つ一つがすべて大切な経験だと思える。失敗した分だけ、次はうまくやりたいという気持ちが強くなるし、努力を重ねた分だ

け、小さな成功が何倍も嬉しく感じられる。この喜びを噛み締めて今日も、包丁を握る。

働く背中を見て

岩倉高等学校 二年

杏名 政幸

「3、2、1」

仲間と二人でカウントダウンをし、震える手で駅事務室のインターホンを押した。

「おはようございます。」

と息を合わせ元気に声を上げた。見なれた駅構内とは全く違う鉄道員の世界。すぐに駅長が駅長室に案内してくれた。まだ、いつもより心拍数が多いのを感じる。駅長と指導者が優しく笑顔で今日の実習について説明してくれた。とても親切で、ほっとしたせいも、さつきまでの震えはなくなっていた。二人でじゃんけんをし、私は改札を選んだ。

改札へ案内してもらい、改札で案内する駅員の後ろのいつもは置いていない椅子に座った。いつも見ることのない駅員目線。次々とたずねるお客様。外国人のお客様も多く、後ろで聞きとろうとするが、何を言っているのか全く理解できなかった。ところが駅員は、すぐに英語で対応し、続々と来るお客様に次々と対応している。その駅員の姿に圧倒された。その時急に、自分がお客様と次々に対応する様子が頭の中で

想像された。そして働くことへの興味がさらに高まった。自分もこんな駅員になりたいと胸の高なりを感じた。指導者の方はこのようなことを言っていた。

「駅は何が起こるか分からないから、何か起きても動じずに対応する必要がある。」

この言葉を聞いて、心が動いた。駅員はお客様を案内するだけではない。何か起きた時は自分が焦ってはだめだ。冷静に動じずに対応することが使命だと感じた。券売機で説明を受けている時、外国人のお客様が指導者に乗換案内が表示しているスマートフォンを見せて何かを求めている。指導者は券売機で、英語で区間や運賃を確認しながら対応していた。その後黒い改札機しか切符はご利用になれないということ伝えていて、乗車する番線も教えていた。そのお客様は切符を改札機に入れてから、出てくる切符をとり忘れてホームの方へと行ってしまった。指導者はそれに気づき駅事務室に戻り、その後改札機に残った切符を持って急ぎ足で、そのお客様がいるホームに向かった。指導者が戻ってきた時、「お客様がどの辺りにいるか一度予測をし、その予測が当たって無事に切符を渡すことができた。さつきも言ったとおり駅では何が起こるか分からないからね。」というお話をしていた。緊急事態が起きてもすぐに判断し迅速に対応している指導者がかっこよかった。その様子を見て、自分もこの指導者のようにすぐに行動できる駅員になりたいと強く感じた。

多くの場面で気持ち良かった鉄道実習。鉄道実習に行けることが決まってからずっと楽しみにしてきた。私は早く社会人になりたいとずっと思ってきたが、この鉄道実習を通して

さらにその思いが強くなった。実際に働く人を見て、大変さも分かり、一人ひとりのお客さまを大事に対応している駅員に憧れた。そして自分が駅員として働いているイメージも前よりずっと増した。

私は小学生の頃から電車が好きで電車をよく見に行っていた。乗った電車を見送っていると運転士さんや車掌さんが手を振ってくれた。優しい乗務員さんにあこがれ、電車に乗る時は、乗務員さんの仕事を観察するようになった。大人数の人々を二人で連携し、目的地まで運ぶ姿がかっこよく、将来電車の運転士になりたいという夢をもつようになった。鉄道実習の中では、駅業務だけでなく信号を管理している仕事や、車両や線路の整備など様々な仕事を見学し、一人ひとりの力が合わさることによって鉄道の安全が守られているところに魅力を感じた。私はその一員になりたいという気持ちを実習を通して強くなった。実習で得た学びを活かし、鉄道を支える立派な人を目指すことを決めた。



専修学校の部 最優秀賞

病気と共に描く未来

ハリウッド美容専門学校 一年

小島 彩 佳

生まれつきの外見の特徴により幼い頃から苦しい日々が続く、自分に自信を持ってないでいた。周りの人と肌が違うためどこにいてもどんな服装をしても目立ってしまい、いじめられることも多かった。高校までは校則でメイクが禁止されていたため、大学入学と同時に初めて本格的にメイクを始めた。すると、少しずつ周囲の人が見た目ではなく目を見て話してくれるようになった。その瞬間、自分自身を認めてもらえたようで感動した。コンプレックスがあっても、ヘアメイクによって外見が変われば心まで前向きになれるのだと気づき、この体験こそがヘアメイクアップアーティストを目指すきっかけとなった。

今年、念願だった美容の専門学校に入学し夢に近づくことができるかと胸を高鳴らせていた。しかし、入学して間もなく体調を崩し、病気が発覚した。手足の震えがひどく脈拍が常時百二十五を超えており、動悸や不眠の症状が現れた。立ち続けると吐き気と眩暈で倒れてしまいそうにもなった。そして、治ることのない病気であると知った時、困難な現実を突きつけられ、学びを続けることは難しいのではないかと深く

落ち込んだ。病気は治ることがなく、これからも付き合っていかなければならない。それでも覚悟を持って入学した以上、簡単に諦めるわけにはいかないと思ひ、病気と向き合いながら学びを続ける決意を固めた。しかし、体調は思うように回復せず、授業に出られない日が続く、周囲に大きな遅れを感じることもある。「私には無理なのは」「夢を諦めるしかないのでは」と弱気になる日もあった。

そんな中で支えになったのは、一緒に学ぶ友人たちの存在だった。クラスメイトは皆、それぞれ美容のプロになる夢をもち、真剣に学びに向き合っていた。その姿を見て、自分が病気になったことを悔しく思うようになった。だが、諦めかけていた時、友人たちが手を差し伸べてくれた。私が欠席した時には授業内容を丁寧に教えてくれたり励ましてくれたりしたのだ。失意のどん底だったが「あと少し頑張ってみよう」と思えた。病気と学びの両立は決して容易ではないが、前向きになれたのは友人たちのおかげである。

この経験から私は「一人では成し遂げられないことも、人とのつながりや支え合いによって乗り越えられる」という人観をもつようになった。美容の学びは技術を習得する場であると同時に、人との関わり方や思いやりの大切さを学ぶ場でもある。私自身が友人に支えられたように、将来はヘアメイクアップアーティストとしてお客様一人ひとりに寄り添い、外見だけでなく心にも勇気と自信を与えられる存在になりたい。

私が目指すのは、単に美しさを提供するだけの美容ではない。コンプレックスや病気などで自信をなくしている人に、

ヘアメイクを通して「新しい自分に出会える喜び」を届けることだ。外見の変化が心の変化を生み、それが人生を前向きに生きる力になると信じている。

もちろん病気の影響で、ドクターストップがかかり、他の人と同じように全ての授業を受けられるわけではない。できないことも多く、悔しさに押しつぶされそうな日もある。しかし、その分、できる範囲のことに真剣に取り組み、少しずつでも技術を磨きたいと思っている。限られた環境だからこそ工夫し、努力を積み重ねることが私の成長につながると信じている。

病気を理由に夢を諦めるのではなく、病気と共に生きながら夢を叶える道を選びたい。困難があっても、仲間の支えを信じて未来へ進む覚悟をもっている。これからも努力を重ね、夢を現実にしていきたい。

専修学校の部 優秀賞

この腕の中の現場から

青山製図専門学校 一年

李 然

建築を学び始めて、まだ半年。けれど私はこの世界の奥深さと自分の限界に、何度も向き合ってきた。

この世界に飛び込むまでに、八年かかった。就職への迷い、

出産による延期、そして産後二ヶ月での再挑戦。ようやく教室の席に着いた私は、すでに母であり、妻であり、ひとりの社会人でもあった。

母、妻、学生として過ごす毎日は慌ただしくも濃密だ。授業の合間にはトイレで搾乳をし、息子の一歳の誕生日には、保育園の誕生会の最中に構造力学の期末試験を受けていた。ある深夜設計課題に向き合っていると、泣き出した息子を抱きながらモデリングを続けた。子どもがiPadのペンを奪い、線を引いた。思わず笑ってしまった。ああ、それが私の「現場」なんだと。

模型製作の時間も私にとって特別だ。図面を立体に起こし、目で見て触れるプロセスに没頭していると、自然に心が静まり、集中の中に喜びが満ちる。育児や家事に追われる日々の生活そのものが修行であり、模型に向き合う時間もまた、静かな修行であり、夢のために積み重ねる尊い一歩だった。

先日、ある貴重な建築見学があった。授業の一環として先生が引率してくれたその機会は私にとってどうしても外せないものだった。しかし当日、保育園から「子どもが発熱している」と連絡が入った。迷った末に夫に話し、現場へ向かった。支えてくれる家族がいて、学び続けられる今に、感謝の気持ちしかない。

見学先は、世界三大建築家の一人、フランク・ロイド・ライトが一九二一年に設計し、弟子の遠藤新が担当した校舎「自由学園明日館」。この建物は、約百年前、一人の女性である羽仁もと子が「家庭」だけでなく「社会」で力を発揮したいという思いから、教育家としてライトに依頼して建てたもの

だった。その強い意志と行動力に、同じく女性として社会に生きる私も強く心を動かされた。

私が建築を志した理由は、単に空間をつくりたいからではない。腕を磨きながら、人の五感に届き、日々の暮らしを少しでも豊かにする空間、心を癒す建築を、自分の手で設計したい。その思いは母になった今、一層強く、具体的になった。建築とは、人の暮らしと人生が立ち上がる場であり、「空間の体験」や「人はどこに感動と癒しを感じるのか」を問いつける学問だ。それは図面の上ではなく、生活の現場にこそ生まれるものだ。日常に深く関わる今だからこそ、その問いに誠実に向き合える設計者になれると信じている。

建築を学ぶ日々の中で、これまでのすべての経験が設計者としての「養分」になっていると実感している。プライベートダイニングの企画・運営、民宿の設計・運営やインテリアデザインの仕事は、生活者、そして職業人としての経験を通じて、空間に対する実感と視点を育んだ。華道の仕事で培った素材や空間への感性は衣装や庭の構成に自然と活かされている。そして母としての経験は、異なる年齢や立場のニーズを、よりリアルに理解する手助けとなっている。

今の私は、決して「余裕の学生」ではない。時間も体力も、いつもギリギリだ。それでも、「母であること」も、「建築を学ぶこと」も、どちらも誇りに思っている。そして、人生そのものが設計図となっていて、これからの職業人生に確かな力を与えてくれると信じている。

その第一歩が、今、この教室にある。



イラストの部 イラスト賞

「明日に生きる」第三十六号 表紙デザイン

私たちは生きていく中で、たくさんの人や仕事と関わり合いながら暮らしています。そうしたつながりを当たり前と思わず、日々感謝の気持ちをもつことが大切だと感じています。この絵は、人とのつながりや支え合いの大切さを表現したものです。人は一人では生きていけません。一人ひとりが社会の一員として、お互いに助け合い、支え合ってこそ、より良い社会が成り立つのだと思います。

世田谷区立用賀中学校 2年 山口 なな

令和7年度第36回作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

＜中学校の部＞

| 番号 | 区分 | 学校名 | 応募者数 | 入選者数 |
|--------|------|-------------|------|------|
| 1 | 中央区 | 晴海中学校 | 10 | 1 |
| 2 | 墨田区 | 両国中学校 | 10 | 1 |
| 3 | 品川区 | 大崎中学校 | 2 | 1 |
| 4 | 目黒区 | 目黒南中学校 | 2 | |
| 5 | 世田谷区 | 八幡中学校 | 8 | |
| 6 | | 瀬田中学校 | 10 | 1 |
| 7 | | 尾山台中学校 | 6 | 1 |
| 8 | | 上祖師谷中学校 | 10 | |
| 9 | | 三宿中学校 | 10 | 6 |
| 10 | 杉並区 | 松溪中学校 | 1 | |
| 11 | | 泉南中学校 | 10 | 3 |
| 12 | 北区 | 稲付中学校 | 7 | 1 |
| 13 | | 明桜中学校 | 10 | 3 |
| 14 | | 赤羽岩淵中学校 | 2 | |
| 15 | 荒川区 | 諏訪台中学校 | 3 | |
| 16 | 練馬区 | 豊溪中学校 | 10 | 1 |
| 17 | 足立区 | 第十二中学校 | 9 | 1 |
| 18 | | 第十四中学校 | 9 | |
| 19 | | 江南中学校 | 1 | |
| 20 | 葛飾区 | 葛美中学校 | 7 | |
| 21 | 江戸川区 | 小松川第二中学校 | 10 | 4 |
| 22 | 調布市 | 第八中学校 | 9 | |
| 23 | 国分寺市 | 第四中学校 | 10 | 1 |
| 24 | 東京都立 | 大泉高等学校附属中学校 | 4 | 1 |
| 25 | 私立 | 愛国中学校 | 2 | |
| 中学校 小計 | | | 172 | 26 |

＜イラストの部＞

| 番号 | 学校名 | 応募者数 | 入選者数 |
|----|------------|------|------|
| 1 | 世田谷区立用賀中学校 | 1 | 1 |
| 合計 | | 1 | 1 |

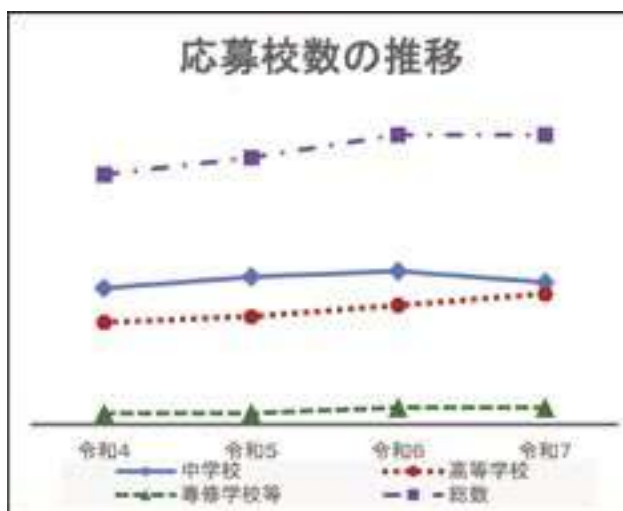
＜高等学校・専修学校等の部＞

| 番号 | 学校名 | 応募者数 | 入選者数 |
|---------|----------------|------|------|
| 1 | 東京都立園芸高等学校 全日制 | 10 | 1 |
| 2 | 東京都立園芸高等学校 定時制 | 10 | 1 |
| 3 | 東京都立農芸高等学校 | 4 | 3 |
| 4 | 東京都立農産高等学校 | 1 | |
| 5 | 東京都立農業高等学校 | 10 | 2 |
| 6 | 東京都立瑞穂農芸高等学校 | 9 | |
| 7 | 東京都立大島高等学校 | 7 | |
| 8 | 東京都立三宅高等学校 | 1 | 1 |
| 9 | 東京都立八丈高等学校 | 7 | 1 |
| 10 | 東京都立蔵前工科高等学校 | 6 | 1 |
| 11 | 東京都立墨田工科高等学校 | 10 | 1 |
| 12 | 東京都立第三商業高等学校 | 10 | |
| 13 | 東京都立第四商業高等学校 | 9 | |
| 14 | 東京都立葛飾商業高等学校 | 10 | 4 |
| 15 | 東京都立忍岡高等学校 | 10 | 3 |
| 16 | 東京都立赤羽北桜高等学校 | 10 | 3 |
| 17 | 東京都立橘高等学校 | 1 | 1 |
| 18 | 東京都立つばさ総合高等学校 | 1 | |
| 19 | 東京都立王子総合高等学校 | 4 | |
| 20 | 愛国高等学校 | 6 | 1 |
| 21 | 岩倉高等学校 | 4 | 1 |
| 22 | 京華商業高等学校 | 10 | |
| 23 | 国際共立学園高等専修学校 | 10 | |
| 高等学校 小計 | | 160 | 24 |
| 1 | 青山製図専門学校 | 9 | 1 |
| 2 | 中央工学校 | 1 | |
| 3 | ハリウッド美容専門学校 | 4 | 1 |
| 専修学校 小計 | | 14 | 2 |
| 合計 | | 346 | 52 |

応募校数・応募者数・入選者数の推移

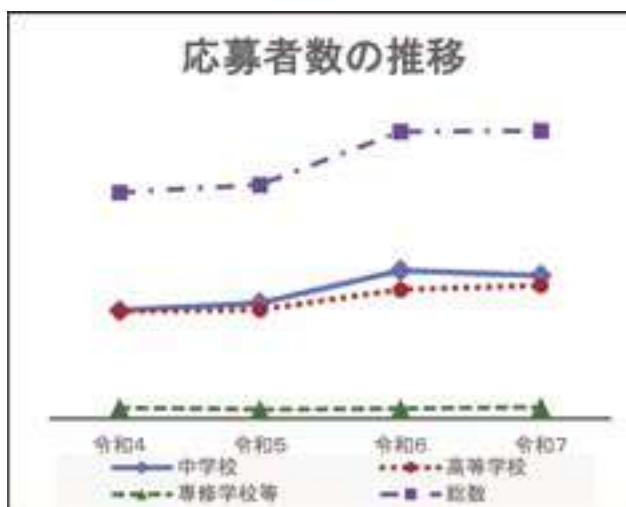
1 応募校数の推移

| 校種 | 令和4 | 令和5 | 令和6 | 令和7 | 平均 |
|-------|-----|-----|-----|-----|----|
| 中学校 | 24 | 26 | 27 | 25 | 26 |
| 高等学校 | 18 | 19 | 21 | 23 | 20 |
| 専修学校等 | 2 | 2 | 3 | 3 | 3 |
| 合計 | 44 | 47 | 51 | 51 | 48 |



2 応募者数の推移

| 校種 | 令和4 | 令和5 | 令和6 | 令和7 | 平均 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 中学校 | 130 | 139 | 178 | 172 | 155 |
| 高等学校 | 129 | 131 | 155 | 160 | 144 |
| 専修学校等 | 13 | 11 | 12 | 14 | 13 |
| 合計 | 272 | 281 | 345 | 346 | 311 |



3 入選者数の推移

| 校種 | 令和4(2022)年度 | | | 令和5(2023)年度 | | | 令和6(2024)年度 | | | 令和7(2025)年度 | | | 平均 % |
|-------|-------------|------|----|-------------|------|----|-------------|------|----|-------------|------|----|---------|
| | 応募者数 | 入選者数 | % | 応募者数 | 入選者数 | % | 応募者数 | 入選者数 | % | 応募者数 | 入選者数 | % | |
| 中学校 | 130 | 20 | 15 | 139 | 22 | 16 | 178 | 27 | 15 | 172 | 26 | 15 | 15 |
| 高等学校 | 129 | 20 | 16 | 131 | 20 | 15 | 155 | 23 | 15 | 160 | 24 | 15 | 15 |
| 専修学校等 | 13 | 2 | 15 | 11 | 2 | 18 | 12 | 2 | 17 | 14 | 2 | 14 | 16 |
| 合計 | 272 | 42 | 15 | 281 | 44 | 16 | 345 | 52 | 15 | 346 | 52 | 15 | 15 |

作文のテーマ別応募数の割合

①作文の内容

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

- 中学校における技術・家庭科の学習
- 高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
- 勤労に関わる体験的な学習

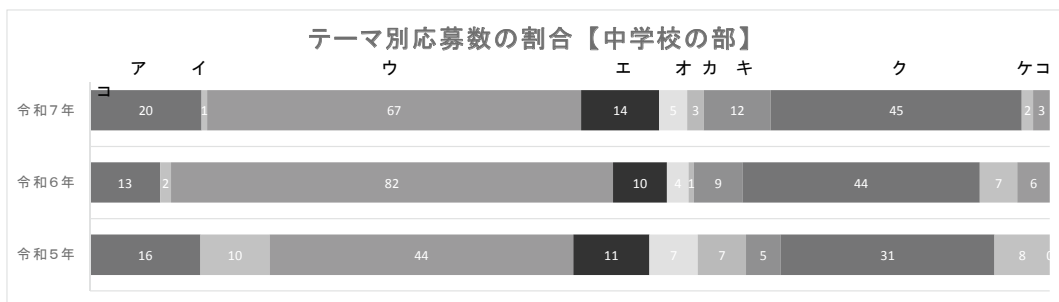
②テーマ

作文の内容について、次のテーマ番号（ア～コ）から関係するものを選択し記述する。

- ア 授業等を通して学び得たこと
- イ インターンシップや現場実習等によって学び得たこと
- ウ 職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- エ つくることの喜び、ものづくりの喜び
- オ 働くことの喜び
- カ 学習に対する心構え
- キ 私の生きがい
- ク 私の進路、将来の夢
- ケ 私の職業観
- コ その他（産業教育に関わる内容のもの）

③テーマ別応募数とその割合

| テーマ 記号 | 中学校の部 | | | | | | 高等学校の部 | | | | | | 専修学校等の部 | | | | | |
|-----------|-------|--------|------|--------|------|--------|--------|--------|------|--------|------|--------|---------|--------|------|--------|------|--------|
| | 令和5年 | | 令和6年 | | 令和7年 | | 令和5年 | | 令和6年 | | 令和7年 | | 令和5年 | | 令和6年 | | 令和7年 | |
| | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) | 応募数 | (割合) |
| ア | 16 | (12%) | 13 | (7%) | 20 | (12%) | 31 | (24%) | 42 | (27%) | 36 | (23%) | 4 | (36%) | 3 | (25%) | 4 | (29%) |
| イ | 10 | (7%) | 2 | (1%) | 1 | (1%) | 21 | (16%) | 14 | (9%) | 22 | (14%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) |
| ウ | 44 | (32%) | 82 | (46%) | 67 | (39%) | 8 | (6%) | 5 | (3%) | 6 | (4%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) |
| エ | 11 | (8%) | 10 | (6%) | 14 | (8%) | 7 | (5%) | 8 | (5%) | 7 | (4%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) | 1 | (7%) |
| オ | 7 | (5%) | 4 | (2%) | 5 | (3%) | 4 | (3%) | 3 | (2%) | 8 | (5%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) |
| カ | 7 | (5%) | 1 | (1%) | 3 | (2%) | 5 | (4%) | 5 | (3%) | 4 | (3%) | 1 | (9%) | 2 | (17%) | 3 | (21%) |
| キ | 5 | (4%) | 9 | (5%) | 12 | (7%) | 8 | (6%) | 7 | (5%) | 14 | (9%) | 0 | (0%) | 0 | (0%) | 1 | (7%) |
| ク | 31 | (22%) | 44 | (25%) | 45 | (26%) | 44 | (34%) | 62 | (40%) | 54 | (34%) | 4 | (36%) | 4 | (33%) | 4 | (29%) |
| ケ | 8 | (6%) | 7 | (4%) | 2 | (1%) | 3 | (2%) | 6 | (4%) | 5 | (3%) | 2 | (18%) | 2 | (17%) | 1 | (7%) |
| コ | 0 | (0%) | 6 | (3%) | 3 | (2%) | 0 | (0%) | 3 | (2%) | 4 | (3%) | 0 | (0%) | 1 | (8%) | 0 | (0%) |
| 計 | 139 | (100%) | 178 | (100%) | 172 | (100%) | 131 | (100%) | 155 | (100%) | 160 | (100%) | 11 | (100%) | 12 | (100%) | 14 | (100%) |





令和7年度「作文コンクール」募集要項

1 趣 旨

東京都産業教育振興会の会員校である東京都内の中学校、中等教育学校、義務教育学校、高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等に在籍する生徒・学生を対象に、産業教育に関する作文の募集を通して、専門教科の学習や勤労への興味・関心や意欲を喚起し、将来の職業人の育成を図り、もって東京の産業教育の振興と発展に資する。

2 主 催

東京都産業教育振興会

3 後 援

東京商工会議所

4 作文の内容

中学校の技術・家庭科の学習もしくは高等学校や専修学校等における専門教科の学習、または勤労に関わる体験的な学習を通して経験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号（①～⑩）から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②インターンシップや現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他（産業教育に関わる内容のもの）

5 作文の題名

作文の内容に沿った「題名」を付ける。

6 応募資格

(1) 中学校の部

東京都内の中学校、中等教育学校の前期課程、義務教育学校の後期課程（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍する生徒

(2) 高等学校・専修学校等の部

東京都内の高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍し、専門教科・科目を履修している生徒及び学生

7 応募期限

令和7年9月12日（金）【消印有効】

8 応募方法

(1) 作成上の注意

ア 原則として所定の原稿用紙またはA4判の400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用する（パソコン等で作成した原稿も可）。なお、生徒指導上の都合で、B4判400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用することは可とする。

- イ 原稿用紙の1枚目右端余白に題名と氏名を書く(校名、学科名、学年等は書かない。)
- ウ 原稿の文字数は、1200字以上1600字以内とする(改行による空白は、字数に含める。字数等に過不足がある場合は選外となるので注意すること。)
- エ 原稿の欄外右下にページ数を記載する。
- オ 自筆で作品を書く場合は2B以上の濃い鉛筆等を用いて、丁寧かつ鮮明に書くこと。

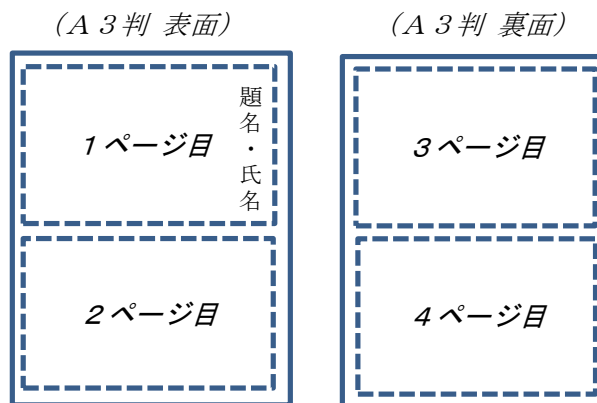
(2) 提出物

ア 作文原稿(原本)

【生徒ごとに】**1部**(原本の上に応募票を付けて、左上をステープラーで止める。)

イ 作文原稿(コピー)

【生徒ごとに】**3部**(A4判の原稿用紙を用いた場合には、順番に並べてA3判両面印刷し提出する。両面印刷ができない場合は、それぞれ左上をステープラーで止めて提出する。作文原稿にB4判を用いた場合には、必ずA4判に縮小コピーして印刷し提出すること。)



ウ 応募者一覧表

【学校全体で】**1部**(応募者は1校10名以内とする。ただし、複数の課程を有する学校(全定通併置校等)については、それぞれの課程ごとに1校の扱いとする。)

9 発表

入選者の氏名は11月上旬頃に関係学校長へ連絡する。また、入選者の作文は作文コンクール入選作品集『明日に生きる』(第36号)に掲載するとともに、東京都産業教育振興会ホームページに掲載する。

なお、入選作品の掲載に際し人権上の配慮等が必要な場合、事務局の判断において、その趣旨を損なわない範囲で字句の削除や修正等を行うことがある。

10 表彰

入選者に対して12月中旬頃に表彰式を行い、本会より賞状及び賞品を授与する。なお、選外者には参加賞を贈呈し、学校長宛てに送付する。

11 その他

- (1) 応募作文は、未発表かつオリジナルのものであること。
- (2) 盗作や不適切な引用等があった場合、審査の対象外とする。書籍やインターネット等から他者の文章を引用する場合は、引用した文章にかぎ括弧をつけて自分の文章と明確に区別したうえで、必ず出典を記載すること。
- (3) 作文中に特定の人物が登場する場合には、その方から公開に関する了解を得ておくこと。
- (4) 応募作文は返却しない。
- (5) 応募作文の著作権は、東京都産業教育振興会に帰属するものとする。
- (6) 作文中には個人名や具体的な店名、事業所名は記載せず、一般的な名称を記載するようにすること(例: ○○保育園→保育所、△△△イレブン→コンビニエンスストア)。

12 提出物の送付先及び問合せ先

〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1 都庁第二本庁舎15階北側
 教育庁都立学校教育部高等学校教育課内 東京都産業教育振興会「作文コンクール」担当
 電話 03(5320)6729

令和7年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長 世田谷区立三宿中学校 校長 濱川一彦

委員 台東区立駒形中学校 校長 渡邊和彦

委員 大田区立大森第八中学校 校長 大山剛史

委員 世田谷区立八幡中学校 校長 白田治夫

委員 世田谷区立深沢中学校 校長 山村恵子

委員 世田谷区立深沢中学校 指導教諭 黒飛武志

委員 世田谷区立用賀中学校 校長 毛利慎治

委員 荒川区立諏訪台中学校 校長 出井玲子

委員 足立区立第十二中学校 校長 千葉千登勢

委員 多摩市立聖ヶ丘中学校 校長 矢野尚子

委員 西東京市立田無第三中学校 校長 大久保順子

委員 教育庁指導部義務教育指導課 指導主事 福住貴夫
委員 教育庁指導部義務教育指導課 指導主事 安田芳

高等学校・専修学校等の部

委員長 東京都立忍岡高等学校 校長 紺野智恵子

委員 東京都立農芸高等学校 校長 吉野剛文

委員 東京都立墨田工科高等学校 校長 三好康弘

委員 東京都立江東商業高等学校 校長 星幸典

委員 東京都立王子総合高等学校 校長 阿久津恵理子

委員 京華商業高等学校 教頭 小口浩史

委員 東京実業高等学校 教諭 寒竹きみか

委員 ハリウッド美容専門大学校 学務部長 佐藤和彦

委員 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 中嶋郁絵

委員 教育庁指導部高等学校教育指導課 課長代理 青木嘉正

あとがき

はじめに、令和七年度作文コンクールで入選された生徒及び学生の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。また、作品を応募してくださった生徒や学生の皆さん、御指導いただいた先生、厳正かつ公平に審査していただいた選考委員の皆様、さらには御後援いただいた東京商工会議所の皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、今年度の応募は、五一校三四六作品、過去最多の応募数でした。また、高等学校の部では農業・工業・商業・家庭・総合学科と、幅広い学科からの応募をいただき、作文コンクールの裾野が広がっていることを嬉しく感じています。

AIの進化により情報の収集が容易になる中、自らの体験を踏まえて思考することの大切さが増しています。生徒や学生の皆さんが作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢を実現するきっかけの場となるよう、来年度も本会の作文コンクールを実施します。会員校の皆さんから、より多くの作品が応募されることを期待しています。

なお、このたびの入選作品集を発行するにあたり、出来る限り原文を尊重して掲載していますが、人権上の配慮等が必要な場合には、その趣旨を損なわない範囲で字句を修正していますので、御了解ください。

結びに、この作品集が会員のみならず広く活用されることを切に願っています。

明日に生きる 第三十六号

— 作文コンクール入選作品集 —

令和八年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒153-8531 東京都新宿区西新宿二丁目一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電話 〇三―五三二〇―六七二九

印刷 株式会社小葉印刷所